

特集

SFC の / と 社会

SFC の 自 治
湘 南 自 治 会
SFC と 国 家
SFC の アー ト
SFC の 景 観

連載

When I was young — 藁谷 郁美

贈る言葉 — 印南 一路、萩野 達也、松井 孝治、武田 祐子

わたしの推薦図書 — 高木 丈也

KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **77**

特集

02 SFCの／と社会

03 往復書簡 SFCの自治

小熊 英二（総合政策学部教授）
宮垣 元（総合政策学部教授）

15 対談 湘南自治会

蒲地 陽太朗（総合政策学部2年）
ベレス中脇 瑠奈ジュリア（総合政策学部3年）

21 往復書簡 SFCと国家

加茂 具樹（総合政策学部教授・学部長）
宮本 佳明（環境情報学部准教授）

31 対談 SFCのアート

脇田 玲（環境情報学部教授）
鳴川 肇（環境情報学部准教授）

39 対談 SFCの景観

小林 博人（政策・メディア研究科教授）
石川 初（環境情報学部教授）

49 編集長と副編集長の振り返り

連載

50 SFC万学博覧会取材記

52 When I was young

藁谷 郁美（総合政策学部教授）

57 寄稿 贈る言葉

No.10 印南 一路 / No.11 萩野 達也 / No.12 松井 孝治 / No.13 武田 祐子

62 寄稿 わたしの推薦図書 No.13

高木 丈也（総合政策学部専任講師）

64 編集後記

SFCの自治について考えたことはあるだろうか。教員による自治、学生による自治。大学運営の中でのSFCの在り方。他大学と比べて、学生による自治に馴染みがないように感じるのはなぜだろう。SFC開設以来、学生、教員、職員が手を取って合ってキャンパスを創り上げてきたことを自治と呼ぶことはできるのだろうか。

本誌初の試みである往復書簡の形式で、小熊英二先生と宮垣元先生に交互に執筆してもらった。

SFCの自治

小熊 英二
(おぐま・えいじ)

総合政策学部教授。
専門は、歴史社会学。

宮垣 元
(みやがき・げん)

総合政策学部教授。
専門は、社会学、経済社会学、
非営利組織論、コミュニティ
論、社会ネットワーク論。

SFCの自治
湘南自治会
SFCと国家
SFCのアート
SFCの景観

No. 77

SFCの / と 社会

しゃ - かい【社会】①人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。諸集団の総和から成る包括的複合体をもう。
(『広辞苑 第七版』岩波書店より引用)

開設から三十年以上が経ったSFC。すでにそれ自体が、一つの「社会」であると言える。他の「社会」がそうであるように、外部へ影響を与え、外部から影響を受けながら維持されてきた「社会」なのである。

本誌ではこれまで、節目節目にSFCを内省的にレビュー(批評)する号を制作してきた。それらを読み返すと、学生や教員の真剣かつ忌憚のない意見が集められ、議論されてきた歴史を知ることができる。

今号で取り上げるのは、これまであまり論じられてこなかった、かつ、われわれ編集部が今このタイミングで論じられる必要があると考えた五つの論点だ。

日本社会や世界各地で今起こっている「大学」や「学問」を巡る論争。ざわざわと広がる不満や諦め。理想と現実。SFCを取り巻く社会と、SFCという社会で今起きていること。

不満や疑問、釈然としない思いを持っているのなら、よく知り、よく考え、意見を持とう。議論することを諦めるのをやめよう。

どうせ変わらないなんてことはないのだ。キャンパスも、カリキュラムも、授業も、研究会も、もともと何もないところから創られたのだから。

あなたは、SFCという社会でどう生きるか。
どのような社会を創っていくか。

小熊さん、こんにちは。

気がつけば新年度となりましたね。なにかと慌ただしい時期かと思いますが、KEIO SFC REVIEWの編集部より往復書簡をとの企画を提案頂きました。あまり勝手がわかりませんが、せっかくでするので、これに乗っかっていろいろと小熊さんとお話出来れば嬉しく思います。どうぞ宜しくお願いします。

さて、編集部より投げ込まれたテーマは「SFCの自治」。「SFCの／と社会」という全体テーマのひとつだそうです。これについて侃々諤々意見交換せよとのことなのでしょう。ただ、地方自治や住民自治は多少関心に近いものの、とくに大学の自治は、しっかりと考察したことがなかったなと気づかされました。

しかし、私も大学生時代がありますので、多少の経験はあります。まずは自分の経験に引き付けて、考える糸口を出せればと思います。た。

自分自身の学生時代を振り返ると、SFCの一期生でしたので、かなり特殊な状況だったと思います。そもそも、建物（それもほとんどが建築中でした）を除いて、学生生活に関わるものは、大学全体の学則以外、ほとんど何もありませんでしたし、意識していませんでした。つまり、制度としての大学はあったが、そこに社会はま

だなかったと言えます。大学生は、もちろん何かを学びに厳しい入試を通り抜けてくるわけですが、同時に「大学生」としての経験を期待して入学してきます。SFCの新生も同じです。しかし、一期生にはそれがすべてでなかったため、早速「騙された！」（本当は誰も騙していないのですけど）

とばかりに不平不満が渦巻きます。私もそのひとりだったように思います。

まずクラブやサークル。これがまったくありません。授業よりも楽しみだったのに、「ヒドいじゃないか」と先生にぶちまけたら、「当然じゃないか。自分たちの生活なのだから、求めずに自分でつくれ」と言われました。そこで、ほぼ全学生が受講していたとある授業を「コマ先生が潰してくださり、何かやりたい学生が教壇で演説風に仲間を呼びかけるといことをしました。テニスサークルもオーケストラも放送研究会もこのときに出来ました。この時間をともにした学生と教員は、一種の共犯関係のようなものです。

いまの七夕祭も、おおむねこんな感じで生まれたものです。ちなみに、食堂も一つだけでメニューもカレーとラーメンとそば・うどんくらいしかなかったもので、「俺たちは家畜じゃない」とやはり不満爆発です。いろいろなところが尽力して下さって、生協前に「ギロス屋」の軽トラが来てくれました。いまSFCにはキッチンカーが来てくれて楽しいですが、これを見たときには、創設時のSFCの食をめぐる惨状を思い出し、多少めまいがしたくらいです。ただ、いずれも学生が始めたようでもあり、教員や職員が仕込んだ面もあります。食の問題は、教職員も当事者ですから。

さて、昔のエピソードは尽きませんが、思い返して気づくのは、結局組織もルールも曖昧なまま、手続きもすつ飛ばして、やりたい人が好き勝手にやっていたなということです。サークルもお祭りも、SFC全学生の総意ではなかったはずで、実のところ「なんかやりたい奴がやっているのだな」と遠巻きに見ている学生も多かったように思います。当時の私は、その気分も半分わかるなと思っ

て過ごしていました。

ただ、こうして我がごとのように思い出を語れるのは、組織やルール以前の何かを共有していたからなのでしょう。それが渴望感なのか自己表現への欲求なのか将来ビジョンなのかかわかりませんが、少なくとも、私にとって、自治とは、組織やルールで互いを管理するようなことでなく、突き動かされて皆で創意工夫するというイメージがあります。

こんなことを振り返ると、自治の当事者とは誰なのかや、その前提となる主体性はどこからやってくるのかなど、いろいろと考えてみたいことも出てきました。小熊さんは、ご自身の学生時代、どのように大学という社会と接していたのでしょうか。何か問題意識のようなものはお持ちでしたか？

もうひとつ、「自治」という、ともすれば古いイメージを持つ言葉を、若い編集部が出してきたことにも興味を持っています。SFC初期は一九九〇年代で、八〇年代半ばに構想され、当時の教職員には六〇〜七〇年代を経験した人も含まれます。いまはその時代感覚とは大きく異なります。そうした「今の時代」との関連についても、もし感じる場所があれば伺ってみたいと思います。もちろん、まったく違う角度からでも。

最初なので少し長めになってしまいました。ちょうど新学期の様子を眺めるタイミングですが、何かお考えあればお聞かせ下さい。よろしくお願ひします。

二〇二四年四月一日

宮垣元

宮垣さん

ゆっくりこんな話をする機会もないので、編集部の企画に感謝したいと思っています。

宮垣さんがSFC一期生とは存じ上げませんでした。私は一九八〇年代に大学生で、会社勤めを経て一九九〇年代に大学院生になり、一九九七年度にSFCに雇われました。その前年度に、専任講師に雇われる面接のために来たのが、SFCを訪れた最初の機会でした。

SFCの最初の印象は「宇宙基地みたいなところだな」というものでした。建物がモダンできれいだっただけでなく、ごみ一つ落ちていない。落書きもなく、ビラも「立て看板」も見当たらない。最初に来たのが夕暮れ時で照明も暗く、人影もなかったためもありですが、あまり人間の活動が感じられず、少々戸惑ったのを覚えています。

私が知っていた大学は、悪く言えばもっと汚く、よく言えばもっと人間の活動が感じられる場所でした。方々で

学生団体がビラをまき、立て看板が乱立していました。当時はいわゆる左翼系の学生組織もいましたが、演劇やバンドや趣味のサークルもいました。

私もミニコミを編集するサークルに入っていて、サークル部室があった学生会館の屋上で、立て看板づくりを一緒にやりました。共同作業ですから、いろいろな話をします。そのサークルで教室を借り切り、当時に人気のあった評論家を招き、講演会を企画したことも思い出の一つです。

私は大学時代には理科系だったのですが、こうして人文系や社会科学系の学生と話す機会が増えて、関心が広がりました。そして卒業後は出版社に雇われ、それを経て社会学系の大学院に進んで現在に至ることになります。

しかしSFCは、私が知っていた大学の雰囲気とは、かなり違っていました。何となく「学生がかわいそうだな」と思い、「せめて講義だけでもおもしろくしてやろう」と考えたのが、私の教員としての原点です。

こういうSFCに対する思い込みは正しくなく、学生は自分たちなりにキャンパスライフを楽しんでいることはその後にはわかりました。とはいえ、学生が自主企画のために教室を借りようとしていたり、掲示物を出すのは今でも困難なようです。

学生による掲示に関しては、全学の規程をもとに、SFCの事務室が規則を運用しています。それによれば、事務室学事担当が内容を確認して許可印を押したうえで、掲示許可スペースに掲示し、許可印がない掲示物は直ちに撤去することです。これは施設管理の観点からはわかりませんが、学生が自らの活動を治めるといって「独

立自尊」の精神を陶冶する規定なのかといえ、やや疑問な気もします。

私が過ごした大学では、学生自治会の「立て看板規則」に沿っていけば、自由にキャンパス内に出してよいとされていました。現在はどうか調べたところ、その点は変わっておらず、自治会のHPには立て看板の作り方も載っています。ただし「立て看板規則」は三章九条二十一項と付則から成る系統だったものとなっており、人権侵害・暴力や差別の助長・誹謗中傷等の禁止、営利目的でないこと、設置後の補修などに責任を負うこと、規則に違反があった場合の自治会執行部による警告や撤去の手続きなどが整備されていました。これを学生たち自身が作成したことに、彼らの自治能力が示されているように思います。(https://todayjchikai.org/service/tatekan, 二〇二四年四月一日アクセス)

宮垣さんも指摘のように、SFCが一九九〇年に創設された当時は、教授や事務の方々には一九七〇年代の左翼学生運動への警戒感があり、学生寮の建設にも否定的だったという噂を聞いたことがあります。そうした三十年前の雰囲気、掲示物に関する規定にも影響したのかもしれない。しかし、いまは時代が違います。

宮垣さんの通信を読むと、SFCも当初は何もないところから、学生が手探りでいろいろなものを築いてきたことがわかりました。その自由闊達さと、上記の掲示物に関する規定がどのように共存していたのか、ちょっと不思議に思いました。宮垣さんの経験から、お考えをうかがいたいと思います。

二〇二四年四月二日

小熊英二

小熊さん

お返事ありがとうございます。授業が始まりましたね。キャンパスが学生で一番賑わう季節で、この話題を語り合うのにちょうど良いタイミングのような気がします。

小熊さんの学生時代の様子、とても面白く読みました。まさに、小熊さんが取り組んでいた活動こそ、当時の私の思い描いた「キャンパスと大学生」のイメージです。そうそう、そういうことを楽しみに入学したのだったと、当時の入学前の期待を懐かしく思い出します。

ところが、そんな期待を打ち砕くように、「人間らしい活動」が何もなかったことは前回書いた通りです。「宇宙基地」どころか「工事現場」だったので、その落差は大きいものでした。

ただ、開設時のSFCが工事現場だったというのはいかにも象徴的です。思い起こせば、勝手に思い描いていた何かをどうにか形にしようとしたのが当時の原動力だったと思います。

私も仲間とともに放送のサークルをつくったのですが、集まったのがとにかく「表現したい」連中ばかりでしたので、ラジオをやったり、映画を撮ったり、ミニコミをつくったり、なんでもありでした。出来たばかりのSFCをなんとか世に知ってもらいたく、SFC開設年の三田祭に映像作品を持ち込んだこともありました。これに印象深いのは、学部長室にコメントを撮りに行かせてもらったり、実際のブースにも教員と職員の皆さんが気にして大勢来てくれたりと、教職員との距離がずいぶん近かったことです。「自分たちの活動」の中に、教員も職員も入っていたという感じでしょうか。

これに関して、SFCの創設に深く関わった井関利明先生(元総合政策学部長)の話が印象に残っています。井関先生がおそらく慶應の助手時代のこと、学生運動に対峙するのに、若いから先頭に立って止めに行く役回りだったそうです。ところが、内心は学生側の気持ちもよくわかるのになど、実は複雑な心境だったと言われていました。大学における教職員と学生の関係性を問い直したいというSFC創設の理念にも、案外こうした経験が影を落としているのではないかとも思います。

小熊さんが指摘された「自由闊達さ」と「掲示物の制限」の共存について言えば、少なくとも当初はルールに縛られた記憶はなく、制限についてもあまり意識せず行動していたように思います。SNSもない時代ですが、私の経験の範囲では、コミュニケーション自体はとても活発でした。自治という言葉を使ってひとつ言えそうなのは、自治の主体も範囲も定まっておらず、むしろ教職員も学生も一緒になって考えていた面はたしかにありました。その意味で、自治の範疇は他の大学とはずいぶん異なるものでした。前回書いたお祭りもサークルも、実のところ学生だけで出来るわけではなく、働きかける学生と、それに応じる教職員の関係があってこそ可能です。対抗的な関係というより、ともに企てる関係に近い感覚がありました。

もうひとつ、SFCの学生の活動が他大学と少し様子が異なるという点は、おそらくSFCの背負った「他とは違う」というアイデンティティの影響もあるように思います。

当時も、何もなかったのですべて作っていくわけですが、一方で、他大学(端的には三田や東大です)を範として同じようなことを求

めながら、他方で、それと同じは嫌で、違うスタイルを探していたように思います。同じ大学祭でも、どうせお祭りなら、他の大学祭ではない、やぐらと浴衣と花火でいこうみたいな感じがそれです。もちろん自覚的にそうしたわけではありませんが。

ただ、おそらく当時の学生と教職員の「他とは違う何か」への志向が、ああいうスタイルになって表れていたのではないかというのが私の見立てです。キャンパスに立て看板がないのも、他大学のキャンパスの光景とは異なるあり方をあえて求める当時の気風があったようにも思います。もっとも、そうではない何かが見出されたわけでもないようで、それは学生と教職員の試行錯誤が足踏みしてしまっていることの表れなのかもしれません。

今のSFCの学生が、そうした志向を持っているのかわかりませんが、若者はさまざまに表現したい存在ですし、その機会や場が制限されるのは望ましいことではないと私も思います。東大では、歴史的にも学生自治に対する意識が高いと思うのですが、SFCでも、自治の動きはいろいろとあるようです（この企画そのひとつとも言えますね）。小熊さんが書かれたように、時代が変わればまたそのあり方も変わるのでしょう。SFCでの自由闊達さをどのように生み出していけばよいのでしょうか。小熊さんには何かお考えありますか。

二〇二四年四月九日

宮垣元

する場合も同様でしょうか。そんな基本的人権の侵害のようなことを、大学が意図しているとは考えられません。

とはいえ私は戦後の学生運動のことも研究したので、この条文の意味も推測できます。それはおそらく、以下のようなことだったと考えます。

敗戦から一九六〇年代には、学生が「ストライキ」を行うことが多くありました。学生は大学で労働しているわけではないので、授業を一齐放棄して抗議の意思を示すのが「ストライキ」でした。それを行う場合には、ストライキの是非をめぐって語学のクラスで討論をやってクラス決議を行い、その決議を携えてクラスの代議員が学部の自治会に出席して、代議員の投票でストライキを議決します。これが恐らく、上記の規程がいうところの「投票」に該当するのではないかと考えられます。

こうして自治会でストライキが議決されると、単なる個々人の授業放棄ではなくて、全学的な討論を経て決定された学生の総意ということになります。そのことを自治会や学生有志がポスターやビラで全学生に知らせ、校門や大教室の入り口で授業に出席しようとする学生を説得して、ストライキ参加を促すことが行われました。授業に出たいという学生からは、個人の自由の侵害だという意見もありましたが、そうしないと「スト破り」を許すことになって、学生総意の表明にならないというわけです。

じつは慶應は、一九六〇年代のこの種のストライキでは先駆的な存在でした。一九六五年一月から二月に、学費値上げに抗議して慶應義塾大学で全学ストライキが行われたのです（詳細と出典は小熊英二『1968』第五章参照）。

宮垣さん

創設時のお話、ありがとうございます。熱気が伝わってくるだけでなく、なんとというか、未組織状態から手探りで自己組織化が進んだようですが社会的に興味深いです。宮垣さんのその後の研究の原典が、ここに潜んでいるような気がします。

さて学内での掲示ルールが全学的にはどうなっているのか、ちょっと調べてみました。慶應義塾大学の「学生の団体、集会および掲示等に関する規程」には、以下のような記述があります。

「第五条 学生および学内団体が学内もしくは学外において、署名運動、資金募集、投票、掲示、ビラ配布、物品販売等の行為をしようとするときは、その旨学生部長に届出てその指示を受けなければならない。」

ちょっと不思議な規程です。これだと学生が起業して物品販売したり、クラウドファンディングで被災地支援の募金活動をする場合は、「学生部長に届出てその指示を受けなければならない」とも読めます。「学内もしくは学外」とありますから、学外で音楽や演劇などの掲示を出す場合や、国政選挙で「投票」

4/6 通目 小熊先生 → 宮垣先生

きっかけは慶應義塾が、大学の学費・入学金・施設拡充費・塾債購入など合計で初年度納入金を約三倍に引き上げると公表したことです。それまで慶應は学生運動の空白地帯と言われていたのですが、三田と日吉の各学部でストライキが決議され、日吉の正門に机や椅子を積み上げたバリケードが作られました。学生運動で大学にバリケードが作られたのは、この慶應のストライキが初めてだったようです。

当時の学生の声は、この時期の報道や『三田新聞』に掲載されていますが、以下のようなものでした。「慶應は決して坊ちゃん大学ではない。間違った見方を改めてほしい」「自分たちの親の収入を考えるととても払えない」「慶應を金持ちだけの大学にしてはならない」。報道によると、当時の慶大生のうち大企業経営者の子弟が十三%いましたが、中小企業従業員の子弟も二十九%いました。当時の『読売新聞』は、「値上げ反対は愛校心―金持ちだけに門戸開くな」という見出しをつけています。

学生の掲げたプラカードや立て看板に書かれたスローガンには、「忘れたか福澤精神」というものがありました。「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」のはずなのに、この値上げはそれに反しているではないか、というわけです。ユーモアを交えて「陸の王者か、金の亡者か」というスローガンもあったそうですが、それまで学生運動の空白地帯だったせいも、マルクス主義や革命思想にもとづく文芸は少なかつたようです。

このストライキは二月に妥協が成立して終わりますが、学生にとっては楽しかったという声が多くありました。「この闘争で活動委員になり、はじめて多くの友だちを見つけた」「あの予想外の盛

りあがり、友達との熱っぽく何時間も続ける議論、僕は多くの仲間を持った」「深夜のバリケードの中のパトロールは、自分がたった一人の孤立した存在ではなく、眠っている仲間と共に今生きているのだ、という思いを実感させた」という文章や発言が残っています。ストライキをめぐって議論をしたり、バリケードで門をふさいだキャンパスに泊まり込んで一緒に自炊したり、その費用を募金したりしたわけですから、早慶戦や三田祭よりも連帯感を感じたという学生の文章もありました。

もっとも、こうしたストライキを過度に美化するわけにもいきません。この時期の学生ストライキの記録を調べると、全体的な盛り上がりは一時的で、後半になると単なる「集団さぼり」になってしまった例も多かった。また「中核派」や「革マル派」といった当時の左翼団体が介入したり、果ては暴力沙汰が起きたりと、決して美しいことばかりではありませんでした。

何より大学側にとっては、こうしたストライキは好ましいものではありませんでした。学生との交渉にあたる教授や事務の人々の心労は相当なものだったようです。一九六五年の慶應のストライキでは、塾長が慶應病院に入院し、そこで学生代表と話し合う状態でした。宮垣さんが触れられているように、SFCの創立当時の教授や事務には、こうした経験をした人々もいたのでしょうか。

以上を考えると、先の「掲示等に関する規程」の意味するところがわかってくると思います。とはいえ、いまの時代には適合していないようにも思います。

またこの規程には、それほど具体的なことは書かれていません。SFCでは学生団体の掲示はA4サイズまでで、事務の許可印を得

たうえで特定の掲示スペースに出すことになっています。二〇二四年発行の『看護医療学部ガイド2024』にも同趣旨の規則がありますが、「詳細はキャンパスにより異なりますので、窓口で相談してください」とも記されています。少なくとも全学の規程で詳細を決めているわけではないのですから、SFCが独自の判断で、もっと学生の自主性を尊重する規則を設けても問題ないようにも思いません。

考えてみれば、SFCは学生に対して、起業やクラウドファンディングなどを奨励しているような気風もあります。うがった見方をすれば、全学の規程に反したことを奨励していると言えなくもありません。SFCの理念がこの規程と必ずしも一致していないとすれば、SFCでの運用は考え直してもいいのではないのでしょうか。

宮垣さんの文章からは、創設時のSFCは学生と教員の距離も近く、自分たちで秩序を作っていく雰囲気があったことが伝わってきます。そのように「自分たちで秩序を作る」という気概こそが「独立自尊」の精神であり、その実践が自治というにふさわしいと思います。

いまのSFCは、創設時よりも教員と学生の距離が遠くなっているかもしれません。しかし、一九六〇年代の歴史を引きずっていないSFCだからこそ、その時代の負の遺産に束縛されない自治を実現することもできるのではないのでしょうか。それを教員と学生の協力で行うことができれば、創設時の自由闊達さを回復する道ではないかと思うのです。

二〇二四年四月二十二日

小熊英二

小熊さん

お返事ありがとうございます。小熊さんの専門でもあり、大事な視点も含まれているように思いました。何より、六〇年代の様子は、いまの学生には新鮮に映るのではないのでしょうか。私自身も経験した世代ではないですが、お世話になった先生には直面した世代の方向もあり、よく伺っていた当時の生々しい様子とも重なります。

一方、いまアメリカの主要大学では大きな学生デモが起きており、各大学の対応にも注目が集まるなど、現在進行形の話でもありますね。大学が学生とどう対話するか、自治をどう考えるかというテーマは、必ずしも正解のない、古くて新しい問題だとも感じます。

慶應義塾のルールも調べて頂きありがとうございます。前回、SFC開設時にはルールなど眼中になかったと書きましたが、学則や規程自体はもちろんあったわけですから、私たちもこのルールの中で活動していたのだなど、今更ながら気づかされました。

せっかくなので、当時の『KEIO SFC GUIDE 1990』をひっぱりだしてみると、たしかに、「掲示の届」の項に、「キャンパス内で掲示を行なう場合は、事務室に届け出て、許可を受け所定の場所に貼るようになしてください。(一般の掲示は原則としてA4サイズまでです)」と短くありました。小熊さんご指摘のSFCのルールは当初からあったわけですね。

また、「学内集会届」の項に、「学内の集会には、授業の行なわれていない教室やその他の施設を使用することができます。詳細は窓口で尋ねてください。」ともありました。

時代背景も含め、私がこの文書などからもうひとつ感じるのは、

学生の自由闊達な活動と、さまざまな脅威から学生を守るこのバランスをどう取るかという大学の悩ましさです。小熊さんもご存じのとおり、学生運動に続いて大学を悩ませたのは、サークルなどを装ったさまざまな団体の勧誘活動で、たとえば勉強会やセミナーなどと称して思惑を持ち学生に近づくケースです。なかには学生が被害者となったり、巻き込まれた学生が加害者となったりと社会問題化しました。もちろん犯罪となれば問題なのは明確ですが、自由な表現は決してキャンパスに閉じることはないので、その境目に線を引きことはとても難しい。だからこそ、こうした問題は繰り返し考えることが必要なのでしょう。

ルールは不変ではなく、時代や社会状況を色濃く反映して生成される、きわめて人為的なものです。ルールにその社会のあり方が投影されているとも言えます。そして、人は小ささまざまな秩序形成を通じて社会をつくりますが、この秩序を問い、自分たち自身で新たに生み出していく過程のなかにこそ、人の生き生きとした活動や自由闊達さが見出せるのだとも思い至りました。別の言い方をすれば、私たちは、この書簡を通じて、大学の「人間らしい活動」「自由闊達さ」の内実とは何だろうかということ、自治を手がかりに語ってきたのかもしれない。

秩序生成の主体は誰かという点も重要だと思います。学生はその主役ですが、考え方も含めて多様であるべきですし、キャンパスの秩序となれば教員も職員も一方の当事者です。その意味では、私たちこそ、この問題にもう少し主体的に向き合わなければならないのかもしれない。誰かまかせにしないことは自治の原点でもありませんし、私にとっても大事なホームです。大学の自由闊達さに、いま

一度SFCらしさという語がつくとすれば、学生と教職員の協力のあり方だろうという小熊さんの指摘にも、大変共感します。

往復書簡もこれが最後となるのですが、このフォーマットは面白いですね。もう少し小熊さんといれこれお話ししたいと率直に思っています。そろそろ字数が尽きてしまったので、また機会を改めてぜひ続きを……。

二〇二四年四月二十八日

宮垣元

の学生運動で、大学の施設に被害が出た事例は多くありました。おそらく一九五〇年制定の規程そのものには書かれていない掲示に関する詳細は、この規程を根拠として、一九七〇年代以降に各学部が内規として設けていったのではないのでしょうか。

それでも宮垣さんが探してくださった『KEIO SFC GUIDE 1990』の記述は、今より柔軟な印象も受けます。たとえば「学内の集会には、授業の行なわれていない教室やその他の施設を使用することができません」とか、掲示もA4が「原則として」とされているなど、さまざまな交渉の余地があったようにも読めます。事務の許可印がない掲示は撤去するという旨も、この時点では明示されていないようです。施設管理に責任を持つ事務の立場としては、さまざまな経緯があって現在に至っているのだと思います。

とはいえSFC設立準備委員だった関口一郎総合政策学部教授が二〇〇〇年に作成した「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス開設史」では「タテカンや学生団体の掲示」についてこう記しています。「禁止など一度もしたことがありません。SFCが開設されて十年間、一度もそういうものが出なかったというだけです」。この「開設史」には、教員と学生が協議して「オメガの学生用掲示板」を作ったこと、イベント時などは「特設掲示板」が設置されたことも書かれています (<https://web.sfc.wide.ad.jp/~late4/sfc10/qanda.htm#12>, 二〇二四年四月二十九日アクセス)。こうした歴史が忘れられ、固定化したルールが独り歩きしたのでしょうか。

この「開設史」からも四半世紀がたちました。こうした原点を知ったうえで、学生や教員や事務が、あるべき形をあらためて議論をしてよいかもしれません。具体名を出してしまいましたが、初回に述べ

宮垣さん

早くも往復書簡が終わりですね。名残惜しいです。

さて前回に引用した「学生の団体、集会および掲示等に関する規程」ですが、じつは一九六〇年代の学生運動を経ての制定ではありませんでした。制定は七十四年前、朝鮮戦争が始まった翌月の「昭和二十五年七月二十四日」で、現行規程は「昭和二十五年十二月十一日改正」です。

当時の時代背景はといえば、一九五〇年六月六日にマッカーサー書簡を受けた吉田内閣が閣議で日本共産党中央委員らの公職追放を決め、二十六日には共産党国会議員六名が失職。さらに六月二十五日に朝鮮戦争が始まり、七月二十八日にはNHKや新聞・通信社が各社合計三二六名の「赤色分子」を解雇すると公表。これらが戦前の言論弾圧の復活を招きかねないという懸念から、各地の大学や学生自治会で議論や抗議が起きていました。

こうした時期に慶應では、「学生および学内団体」が「学内もしくは学外」で署名や募金、投票、掲示、物品販売等を行うときは「学生部長に届出てその指示を受けなければならない」という規程を設けたわけです。うーん、日本現代史ですね。

しかし私が一九六五年の慶應の学費値上げ反対運動を研究したときに、掲示や投票を学生部長に届出て指示を受けたという記述を読んだ記憶がありません。この時期は高度成長のさなかで、一九五〇年前後のような騒然とした時代ではなく、朝鮮戦争時に制定された規程は有名無実になっていたのではないかと思います。それがどういう経緯で現状に至ったかは不明です。一九六〇年代

6/6 通目 小熊先生 → 宮垣先生

たように私が卒業した東京大学では、学生自治会が「立て看板規則」を制定して自主管理しています。慶應の学生、SFCの学生は、そこまでの自治能力がないのでしょうか。私はそうは思いません。福澤論吉は「学問のすゝめ」でこう書いています。「独立とは自分にて自分の身を支配し他に寄りすぎる心なきを云ふ。自ら物事の是非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智慧に依らざる独立なり」。理想論かもしれませんが、「自由闊達」と秩序のバランスについて、学生みずからが試行錯誤しながらでも「是非を弁別」できるようなるのが「独立自尊」でしょう。

大学としては、学生にそつした「独立自尊」の精神を育むために、どういう機会や環境を提供できるのか考えるべきかもしれません。中国やロシアなど、大学内ですら学問や言論の自由が失われつつある国が多い現在、このことは重要だと思います。

一方で福澤は、「独立の気力なき者は必ず人に依頼す」とも書いています。自ら省みれば、教員も学生もこうした議論をあまり行わないまま、事務の方々に管理の苦勞を「おまかせ」してきたことが一番の問題かもしれません。

全学の規程そのものが七十年以上も改正されていないとすれば、その運用は各学部に任ざられていたのでしょうか。そうだとすれば、運用を変えることもできるはずですよ。まずはこの往復書簡のように、率直に疑問を共有して、話し合ってみることが第一歩でしょう。

この企画、楽しかったです。本当に。

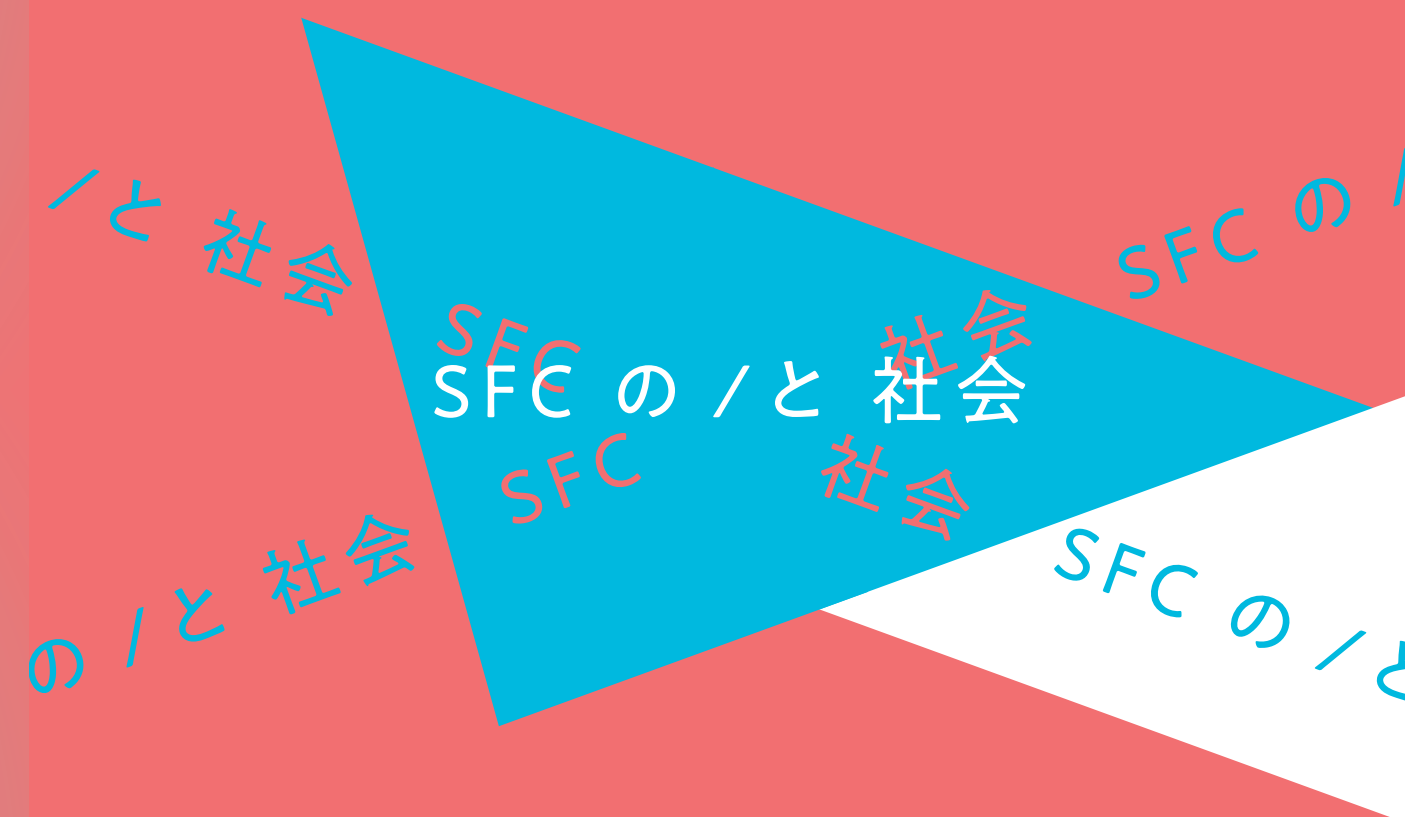
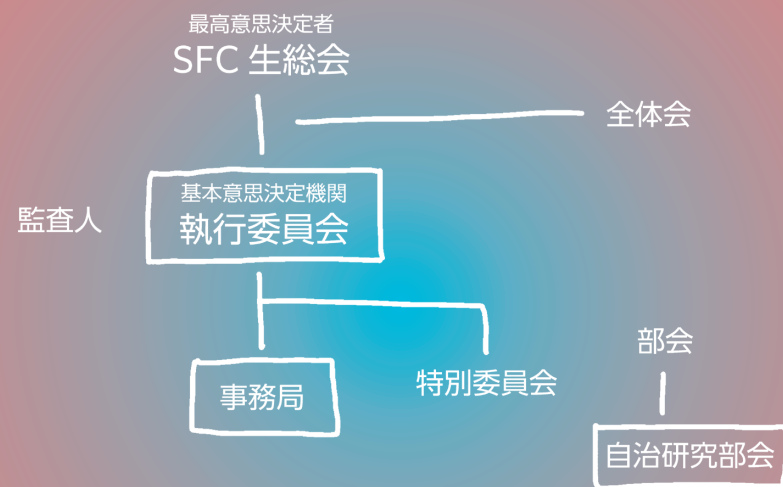
二〇二四年四月三十日

小熊英二

2021年に設立された湘南自治会。多岐にわたる活動をしているが故、その実態を捉えることは難しい。湘南自治会がどのようなことをしているのか。湘南自治会の自治とはどのようなものなのか。第3代執行委員のお二人に話していただいた。

湘南自治会

湘南自治会の組織図



● キャンパス運営に関わるための プラットフォーム

—— 湘南自治会の特徴を教えてください。

ベレス中脇瑠奈ジュリアさん
(以下、ベレス) まず湘南自治会の大きな特徴として、特定の個人の代表がないことが挙げられます。五人の執行委員が対話することによって、意思決定を行います。

個人の代表を立ててしまうと、SFCの良さである多様性が反映されません。五人で多様性を担保できているかという点、必ずしもそうではないのかもしれない。けれど、まずは五人が対話することが大事だと思っています。だから会議に非常に時間がかかります。毎週行われる会議は、大体二時間から三時間くらいです。

また、湘南自治会を、学生がキャンパス運営に関わるためのプラットフォームにしたいという思いがあります。SFC生総会など、多くの人が関わって、もっとSFC



ベレスさん

を良くしようと考えていく場を用意しているのが湘南自治会の特徴です。

蒲地陽太郎さん(以下、蒲地) 自由な雰囲気があることも、湘南自治会の大きな特徴だと思います。名前からは堅い雰囲気を感じるかもしれないけど、会議中にダジャレを言ったり、趣味の話をしたりするような明るく自由な雰囲気で。

また湘南自治会憲章に、やりたくないことはやらなくてもいい、等しく個人として尊重されるといような内容があるように、みんな

なが心地よいと思える空間づくりをしています。

ベレス そうですね。みんなが気持ちよくいられる組織を全員で作りたいという共通認識はあると思います。そのために湘南自治会のルールを共有することを目的とした研修なども行っています。

——お二人が湘南自治会に関わるようになったきっかけや今の湘南自治会の中での仕事を教えてください。

蒲地 入学して湘南自治会の新歓に参加した時に、仲が良くて笑

タイプなことを言ってくれたりします。そういう面が組織を活気づける上で重要な役割を果たしていると思っています。

● 湘南自治会の自治とは「より良くすること」

—— 湘南自治会にとって、自治とはどのようなものでしょうか。

ベレス 私の意見では、湘南自治会は必要に迫られて何かをしているわけではありません。自分たちの在り方やこれからどうしていきたいかを主体的に問い続けて、選択して、実現していくということが自治の一つだと思います。

蒲地 SFCの学生自治会としてどういうことができるかなと考える時は、長期的に見た自治の在り方に目を向けることを大切にしています。

ベレス 「これまで行われてこなかったけれども、これからはやった方がいいよね」「こうなっていたらいいよね」などと考える

顔が溢れる環境だったことに惹かれました。入会から一年経った今では、執行委員になりました。その他に、イベントや企画を担当する事務局の局長補佐も務めています。局長補佐としては、問題が起きた時に解決策を考えたり、問題が起らないようにするための対策を練ったり、人事管理やメンバーの成長を助けるための仕事をしたりしています。今年からは、新規メンバー向けの研修を担当し、湘南自治会で行われる企画がどのように進んでいくのかを伝えていきます。

ベレス 私は、入学前にオンラインで開催されていた湘南自治会主催の履修相談会に参加したことがきっかけで、一年生の四月末に入会しました。決め手になったのは、湘南自治会というコミュニティにいると、「安心できる」と思ったことでした。もともと心理的安全性や人を大事にする組織に対して興味があり、制度的に心

がら行動しています。何か形に残るようなものを作ったり、日常の何かを手伝ったり、本当に様々な活動があります。みんな、学業が本業ではあるけれども、一つのコミュニティを作り、試行錯誤する毎日です。いろいろな人が関わる場所を作り、一緒にキャンパスをより良くしようと考えていることも、自治の一つではないでしょうか。

—— 大学における自治とはどのようなものだと思いますか。また、湘南自治会が他の学生自治会とは異なる点があれば教えてください。

ベレス 異なる点しかありません(笑)。先ほども言ったように、大学における学生自治は、自治行政とは異なり、必要に迫られて何かをするわけではないというのが私の意見です。湘南自治会のキーワードに「より良くすること」を考えると「より良くすること」これが大学における学生自治、S

ようちゃん(蒲地さん)は私が事務局長補佐にスカウトしました。俯瞰的な視点からメンバーを見ることができ、メンバーの帰属意識を高めることも考えてくれる人は誰だろうと考えた時に、真っ先に思い浮かんだのがようちゃんのことでした。ようちゃんは、空気を和やかにしてくれたり、ポジ



蒲地さん

FCにおける湘南自治会の学生自治です。

「学生自治会だから、自分たちで全部やる。学生の権利を主張していく」というよりは、学生に限らずいろいろな人を巻き込みながらこの場を良くしていくように考えています。

蒲地 自治ってそもそもなんだろうと考えた時に、過激な学生自治や学生運動の歴史が頭をよぎる方もいらっしゃると思うのですが、湘南自治会はそういうものとは異なります。「より良くすることを考える」のように、SFCの学生生活をより豊かに、快適にするためにどのようなことが必要だろうか。自分たちに何ができるだろうか。湘南自治会は、学生自身が主体となって働きかけられるプラットフォームとしての役割を担っています。そういうところが湘南自治会らしさだと思います。SFCには、慶應義塾他のキャンパスとは違う独特な面があります。

また、全塾協議会にSFCの学生の主張を伝え、SFCの存在感を高める役割も担っています。全塾協議会というのは、慶應義塾全体の学生自治組織で、湘南自治会の上位組織です。学生が納める自治会費を全塾協議会の所属団体（注2）に再分配しているのは、この全塾協議会です。そこでの予算折衝に向けて、湘南自治会はSFCの学生を代表して声を上げることが出来ます。

ベレス これはあるよね。
蒲地 あると思います。
ベレス 湘南自治会には、自治が一番の関心事の人もいれば、違う関心から参加している人もいます。私もそうでしたが、湘南自治会に入る前までは、ほとんど自治



す。そのようなSFCの学生自治会として、キャンパスの特徴を踏まえながら、必要なものや良いものを提供しようとする湘南自治会もまた、独特な団体と言えるだろうと思います。

ベレス 私もそう思います。SFCは開設から三十年経っているとはいえ、慶應義塾のキャンパスの中では比較的新しいキャンパスです。そのキャンパスの中で、湘南自治会はさらに新しい組織です。

ないんですよね。

また、全塾協議会にSFCの学生の主張を伝え、SFCの存在感を高める役割も担っています。全塾協議会というのは、慶應義塾全体の学生自治組織で、湘南自治会の上位組織です。学生が納める自治会費を全塾協議会の所属団体（注2）に再分配しているのは、この全塾協議会です。そこでの予算折衝に向けて、湘南自治会はSFCの学生を代表して声を上げることが出来ます。

●目的は人それぞれ
——「人の役に立ちたいという人たち」が集まっている湘南自治会の中で、自治に対する意識に違いはありますか。

ベレス これはあるよね。
蒲地 あると思います。

ベレス 湘南自治会には、自治が一番の関心事の人もいれば、違う関心から参加している人もいます。私もそうでしたが、湘南自治会に入る前までは、ほとんど自治

について考えたことなかった人

もいます。様々な人と交流することが好きな人もいれば、メールの書き方などを学ぶことや法律用語に触れること、HPやSNSなどのデザインを担当できることを理由に参加する人もいて、何を求めているかは人によって様々です。その点で、自治に対する意識や自治会という組織の捉え方は人それぞれです。

蒲地 湘南自治会は名称に「自治」が入っているが故に、会員全員が自治を目的に活動していると思われるかもしれませんが、参加の動機は様々です。

ベレス 目的がどんなものであれ、自治会という場所に参加してくれることが自治の基盤であると考えています。自治に詳しくないからダメということは一切ありません。ただ、全く共通点がないわけでもありません。自治会の会員間で共通しているのは、「誰かの役に立ちたい」という思いを



から、私たちはとても身軽なんですよ。意思決定を素早く行うことができ、普段の会話で出てきたようなことがすぐに企画になることもあります。ベンチャー企業みたいなものです。このような面は、百年以上の歴史を持つ他の団体とは違うなと思います。

異なる点は、他にもたくさんあります。ぜひ知ってもらいたいのは、あなたが「これを変えたい」と思った時に湘南自治会に直接請願（注1）できるという制度です。この制度によって、SFCのどの学生も湘南自治会の学生自治に関わることが出来ます。他のキャンパスだと自治会がなかったり、何かを変えたくてもすでに慣習として決まっていることが多いようです。

SFCの場合、請願が送られてきたら、私たち湘南自治会には七日以内に回答する義務があります。今まで送られてきた請願の一つに、SFCのWi-Fiの速度が

場所によって違うと感ずるので調べてほしいというものがありません。その時は、湘南自治会のメンバーがキャンパスの様々な所でインターネットの速度を調べ、事務室に対してWi-Fiの整備の提案をしました。このように、自分の思ったことを形にすることができて準備していることは、湘南自治会の特徴です。

私たちが平日頃から考えているのは、誰のための自治なのかということ。湘南自治会には、SFCの学生のためになるのなら頑張っただけ、誰かのために何かをしたい、という思いを持つ人が集まっています。キャンパス内では、どこの部署の管轄なのか、よく分からない問題も発生します。

そういう問題を湘南自治会は積極的に引き受けています。だから、湘南自治会って何をやっている組織ですかと尋ねられると、仕事の種類が多すぎて一言では答えられ

まっているのが、湘南自治会であると思います。

——教員や職員との関わりへの意識の差はありますか。

ベレス その点についても、人それぞれの面がありますが、湘南自治会の会員に共通する認識もあります。学生の自治権を押し出していきたい。そのためには、教員や職員と対立するのではなくて、むしろお互いに手の回らないところを補い合うような関係にならなくてはなりません。事務の方の手が回っていないところを手伝ったりしながら、学生が自由に何かをできる場所や機会を増やしていきたい。こういう考えを湘南自治会のメンバーは持っています。クラブハウス棟（注3）の運営はその一例ですね。

長期的なビジョンとして、教員と対等な立場でものを言える関係を作っていくと考えています。本来の学生自治とは、学生を守り、エンパワーメントし、一緒

SFCと国家

大学は国家権力から独立していなければならないと言われていた一方で、省庁との交流人事や官学連携の研究など、SFCは行政機関と協力関係を築いている。相反するようにも見えるこれらの関係の在り方は、一体どのような考えのもとで成り立っているのだろうか。

今回は、「SFCの自治」に続き、往復書簡の形式で、加茂具樹先生と宮本佳明先生に交互に執筆してもらった。

加茂 具樹
(かも・ともき)

総合政策学部教授・学部長。
専門は、現代中国政治外交、比較政治、東アジア国際関係。

宮本 佳明
(みやもと・よしあき)

環境情報学部准教授。
専門は、気象学。

に何かをやっていくこと、そして、何か「おかしい」と思うことがあるなら、学生以外の相手にもそれを伝えられることだと思います。ただ、日々の業務では、なかなかそこまで考えられていないかもしれません。例えば、私が育ってきた環境の中では、自治という考えに触れる機会はあまりなく、自治という言葉にも全く馴染みがありませんでした。だから今、湘南自治会で毎週開かれる自治研究会を通じて、自治の歴史などを学んでいます。

——自治研究会では、どのようなことを学ぶのでしょうか。

ベレス 研究会は様々なことを学び、考えるための場です。SFCの中で湘南自治会が行うべきことは何なのかを考える回もありました。

湘南自治会に入会した会員は全員、基本的に自治研究会に参加します。毎週開かれる自治研究会で学ぶコンテンツは、「フクロ

ウ」というグループが作ります。フクロウのメンバーが過去の事例や他大学の事例などを集めて、それらについて湘南自治会だったらどのように対応するかを考えたり、自治の歴史を数百年前から学んだりします。自治研究会には、自治会の会員だけでなく、SFCの学生なら誰でも参加することができます。

蒲地 「フクロウ」の名前は、加藤寛先生(初代総合政策学部長)のミネルバのフクロウの話に由来しているそうです。

ベレス 湘南自治会を作った人はロマンチストなんです(笑)。自治研究会は本当によく考える場です。会員の中には授業以外に新しいことを学べる貴重な時間だと言っている人もいます。

自治研究会をはじめ、湘南自治会の持つあらゆる場や機会をSFCの学生や教職員が参加できる場にしたいです。

(構成:堀江真咲)

注1 請願とは、湘南自治会に直接意見を出すことを指す。湘南自治会員にならなくても、SFCをより良いものにする自治に関わることができるとの手段の一つである。

注2 慶應義塾大学全体の自治組織である全塾協議会のもとには、文化団体連盟本部や湘南自治会など二十五の所属団体がある。学生が納入する自治会費は、全塾協議会によって各所属団体に再分配されている。

注3 クラブハウス棟・フイール館とサイ館のことを指す名称。様々な学生団体の課外活動の拠点として使用されている。

ベレス中脇 瑠奈ジュリア
(べれすなかわき・るなじゅりあ)

総合政策学部3年。
湘南自治会では、執行委員と事務局長を兼任。

蒲地 陽太郎
(かもち・ようたろう)

総合政策学部2年。
湘南自治会では、執行委員と事務局長補佐を兼任。

宮本佳明さんへ

こんにちは。加茂具樹です。今回は、宮本さんと私は、少しややこしい問題をめぐって、対話することになりました。どうぞよろしくお願いします。

私たちは「KEIO SFC REVIEW」誌の編集部から「SFCと国家」という題を投げかけられました。この企画をつうじて、SFCと「公権力を有する統治組織や行政機関としての国家」との関係のあり方を考える手掛かりを得たい、と編集部は言うのです。

「SFCは行政機関との協力関係を積極的に築きあげている」。編集部は、そうした関係を表すSFCの二つの姿を示してくれました。一つは、SFCが官庁と人事交流をしていることです。いま総合政策学部が警察庁と厚生労働省、防衛省と、環境情報学部が総務省と環境省との人事交流の枠組みを設け、合計五名の有期の専任教員を迎えています。まもなくもう一つ増えます。いま一つが、官学連携といわれる官公庁との共同研究や委託研究をおこない、実践的な教育研究を展開している教員が多いということです。

しかし編集部は、SFCが国家と積極的に協力していることに注目して次のように語るのです。「SFCに限らず、大学という組織、そして研究というものは、国家権力から独立していなければならぬ」という論も確固としてある」と。

こうした認識をふまえて編集部は私たちに、自らを取り組む研究領域における「国家との間の協働関係のあり方、その逆に、国家からの干渉を回避するために意識していることは何か」を教えて欲しい、と依頼してきたわけです。

では、はじめましょう。

そもそも、「行政機関との協力関係を積極的に築きあげていく」ことは問題なのでしょうか。

この指摘、総合政策学という「新しい」学問を学部時代に学んできた政策・メディア研究科の学生は、他大学の院生の友人から、よく受ける問いです。少なくとも私はそうでした。友人は、おまえ達の「新しい」というのは何かと、問うのです。からかう感じで。それに真面目に答えるのだとすれば、次のようになります。「従来の学問は、いかに正確に物事を理解するかに力点を置いていて、問題があれば、その原因の究明が重要なことであった。しかし、誰が問題を解決するのか、どうやるのかにはなかなか踏み込んでこなかった。こうあるべきという論を張ることはできても、それを実現するのは自分ではなく、実業界や官界の役割とされてきた。しかし、市場の失敗、そして政府の失敗もあり得ることが分かり、単純な解決ではすまないことが分かった現代では、私たちが自分の問題として解決を積極的に考えなくてはならない。そこが総合政策学と学部の出発点であり、新しさなのだ」と。まあ、この回答は真面目すぎますね。でもむかし、SFCは外からやんやとからかわれました。だからちゃんと反論しないとイケない、という思いがあり、友人と考えました。

で、こう言った後、国家との関係については、こんなふうに話していました。この「新しい」学問を奉じている私たちの使命は、真理を追究し、その先に、新しいものをデザインし、そして日本と世界を良くすることであり、そうであるがゆえに、問題解決の方法を実施するアクターの一つである国家は、SFCの重要なパートナー

になるのだ、と。

もちろん、学問と国家との関係が、そんな単純ではないことは理解しています。

私は地域研究者で、現代中国が研究対象です。この領域において、学問と政治権力の関係を考えたことがない研究者は、いないでしょう。研究対象である中国においても、私が生きている日本の中国研究においても、学問と政治権力の関係は、とても重たい問いです。

政治学というディシプリンを踏まえて研究しているのであれば、政治とは何か、国家とは何か、という問いは、常に目の前にあります。政治とは「価値の権威的配分の過程」であり、言い換えれば「政治とは権力者が強制的、あるいは合法的にある一定の価値を社会に強いること」と教科書に書かれています。また、「国家が暴力行使への『権利』の唯一の源泉とみなされている」と言われます。ですから、学部で中国政治、そして政治学に関心を持ちはじめた頃から

——その当時に思ったことを正確に文字にすることはできませんが——、自分が生活している社会において国家権力に対しては常に緊張感をもって接しなければいけないのだな、と思っていました。学生の時は、あくまでも「頭の中では」なのですけどね。二〇一六年十月に私は外務省に転籍し、香港にある日本総領事館で、二年間、外交官として活動したことがあります。そこで私は国家権力に肉薄する機会がありました。現実の「国家権力」や「緊張関係」は、「頭の中」で思い描いていたものよりも、はるかに重苦しいものでした。

もう一つ。私も含めて地域研究者はみな、対象となる地域に魅了されたことから研究にのめり込んでいるはずですが、私はそうでした。

私は中国の歴史や広さという、その「奥行き」に魅了されました。が、一方で、現代中国政治史には国家権力が暴走する記録が刻まれています。この歴史的経緯を経て、私の研究対象である現代中国政治があります。権威主義政治の下で中国を研究対象としているかぎりにおいて、国家権力の暴走は、常に、直視することが求められる課題です。国家は国民に愛することを求めるけれど、国家は最後まで国民を愛するのでしょうか。

もう一つ、重要なことがあります。戦前日本の中国研究、すなわち東洋学が、日本の中国への侵略と緊密な関係であったこと、そして戦後の日本の中国地域研究は、こうした戦前と戦中の失敗を反省し、発展してきた、という歴史的経緯です。また戦後に発展したいわゆる地域研究の起源は、国家戦略を支える学問であったこともそうです。ある国家において地域研究という学問が伸張してきたことと、その国家のグローバルな規模での影響力の伸張は同期しています。日本がそうでしたし、いまの中国がそうです。

こうして総合政策学部において現代中国研究をしていると、政治権力と学問の関係のあり方は、常に考えさせられる問いです。

宮本さんは、私とはまったく異なる領域で教育と研究に取り組みられていますね。宮本さんは編集部が投げかけた問いをどのように受け止めたかか。

二〇二四年四月二十七日

加茂 具樹

加茂具樹さんへ

こんにちは、宮本佳明です。話題をご提供くださり、ありがとうございます。加茂さん（失礼ながら「さん」付けて呼ばさせていただきます）と、こうした内容で対談をさせていただけるのは大変光栄です。どうぞよろしくお願ひします。

当初この話題をいただいた際には、私で良いのかと戸惑いました。というのは、他のSFCの先生方と比べて、私の専門分野はあまり国家と繋がりが深いものではないと思うためです。私は地球惑星科学、特に気象学を専門としています。地球惑星科学分野は、他の多くの理学の分野（数学、物理学、化学、生物学など）と同様に、地球や惑星の気象・地質諸現象の理解を深めることを大きな目的としており、まさに加茂さんのご友人への「真面目な」回答例のような従来の学問と捉えることができます。私もSFCに来るまでは、この世界にどっぷり浸かっておりました。自然現象を対象とすることからも、加茂さんや他のSFCの先生方の研究分野と比べて、ある意味純粋無垢な分野だと思います。こんなことを言うと同じ分野の方々に怒られてしまうかもしれませんが、良くも悪くも社会との関わりが薄く、強いてあげれば天気予報を通して関わりがあるという分野です。その分、社会情勢にあまり左右されることなく、純粋に研究に集中して取り組むという面が強いのと思います。そのため私は、加茂さんが前の書簡でおっしゃっていたような、研究活動を行う上で、これまで国家権力に対して緊張感を持つことはありませんでした。これは私が特に何も考えていなかったからなのかかもしれませんが、海外（米国）での研究経験もありながら、こ

うした感覚で、純粋に学問を追求することができたのは幸せなことかもしれません。

しかしSFCに来て、自分の視野が一気に広がりました。元々気象学は軍事的な応用可能性が高いということもあり、学内でご指摘をいただいたりすることで、研究テーマを選ぶ際に、一度検討してから進めるようになりました。もちろん、これによって純粋な気象学研究を行わなくなった訳ではありません。今でも、個人的にもしくは研究室の学生さんや他機関の共同研究者の方々と共に純粋な気象学研究を行なっております。教育面でも、学生さんが在学中に身につけた知識・研究成果を、将来どのように活用し得るのか、を考えるようになりました。気象学という特色から、研究成果が将来的にどう利用されるのかは、完全に予測することはできないにせよ、可能な範囲で想定するようにしています。

また、近年では日本国内で台風などの気象現象を人工的に制御しようという公的資金によるプロジェクトも動いています。こうした気風から、私の所属する気象学会でも、これまでの純粋な研究がメインという形から、より社会を意識した内容の研究や周辺分野を「ご専門とする方々の研究も多く見られるようになりました。特に台風は、膨大なエネルギーを伴っており、それを制御できるようになった時に（不完全な形でもそれはそれで問題なのですが）、完全に安全のためだけに利用されると保証できるのか、などというような点も意識する必要があります。そのため、そもそも制御自体が難しいという科学技術的な課題に加えて、倫理的・法的な面も含めて多くの点をクリアしなければなりません。

こうしたことから、私が専門とする分野でも、国家との関係性は

深く、研究・教育活動を進めていく上で、きちんと考えて判断していく必要があると思っています。

上でご紹介した点は比較的シリアスなものでしたが、もっと身近な意味で、私がSFCで最も国家のことを身近に感じるのは、官庁との交流人事でSFCにいらっしやっている先生方とお話しする時かもしれません。交流人事でいらっしやる先生方も優秀な方ばかりで、これまでの背景や仕事内容も多岐に渡り、私とは大きく異なるため、色々なお話を伺うことができます。一教員・個人として大変勉強になる環境です。また、SFCの学生さん等にとっても、複数の研究会に所属したり幅広い分野の授業を履修することができることから、明確に「この先生は研究畑」、「この先生は官庁から」と意識することは無いと思うものの、多様な教員の考え方を肌で学ぶことができる貴重な環境であると思います。特に、交流人事でいらっしやる先生の研究会では、より実践的な研究に取り組みされている印象があり、所属する学生さん達の将来を決める上で有益な時間になっているのではと考えます。そのため、実践的に重きを置くSFCにおいて、官庁からいらっしやる先生方の存在は非常に重要であると考えます。

SFCは教育機関でもありますし、所属する学生さん達に、授業・研究と言った学生生活を通して成長を促すことが大切だと思います。おっしゃるように加茂さんのご専門は、国家との結びつきが強いと思いますが、教育活動において、何か気にかけていらっしやることはございますか。

二〇二四年五月二十一日

宮本佳明

宮本佳明さんへ

教育活動において心掛けていることは何か。大切な質問ですね。

そうですね、私がいま心掛けていることは、「如何に知識を次の世代に継承するのか」です。様々な説明ができると思いますが、地域研究者として答えてみたいと思います。

自分自身を日本の中国研究、地域研究の学問的系譜のなかに置いて、よく考えます。私の指導教員である小島朋之先生は、一九八三年から『東亜』という雑誌で、毎月、中国の現状分析を論じていて、二〇〇八年に亡くなる直前の二〇〇七年までの二十四年間にわたって執筆を続けていました。小島先生の指導教員は塾長を務められた石川忠雄先生でした。石川先生は、一九五〇年代から中国を論じておられ、日本の対中政策にも大きく関わってこられました。石川先生は、戦前、戦中、戦後に法学部に奉職された及川恒忠先生の指導を得ています。及川先生は、いまから百年前の一九一〇年代

から三〇年代に中国留学されたようです。こうした先行研究に触れていると、自分自身も日本と世界の重厚な中国研究の歴史の一つのピースなのだ、と思うのです。

こんなことを考えるのは、「自分の指導教授は誰々で」という懐古主義的なことではなく、先生は何を問う学問をしてきたのか、に思いをめぐらせるからです。

先に掲げた先生を含め、日本の中国研究が一貫して掲げてきた問いは、中国との関係のあり方でした。日本にとって中国は、如何なる時代においても日本の繁栄、発展、平和に関わる重要な「課題」です。明治維新以来の日本の歴史を振り返れば、日本の「課題」とは、日本と中国、日本と米国との関係のあり方でした。その政策的失敗が一九四五年でした。その失敗のうえに今があります。

過去の「課題」は、現在の「課題」をかたちづくり、未来の「課題」の有様を規定します。いまから五十年ほどまえの『中央公論』誌に石川忠雄先生は、中国共産党の外交政策の分析枠組みをつくるための試論的考察を寄せています。この寄稿文は、中国の動向を考えることの意味の説明からはじまっています。中国は、一九六四年十月に初の核実験を実施し、核爆発を成功させました。石川先生は、こう述べています。「中華人民共和国（以下中共と略称する）での核実験の成功は、中共の国際政治における威信と影響力を増大し、中共の動向を考えることなしに国際政治の重要問題を論ずることは不可能にした、といっても過言ではないであろう。従って、現在及び将来における中共の動向を正しく理解し判断することは、たんに日本の安全と繁栄にとつてばかりでなく、広く世界の平和維持のためにも、是非とも必要であるといわなければならないのである」。

プを変え、規範を改め、対抗勢力を養成し、調査と専門知識にもとづいて練り上げられた政治的な解決策の提示を促す必要がある。つまり政治によって技術革新の帰結を変えることができる、と語っています。

こうした理解を踏まえるのであれば、政治学は政治と対話をする必要があります、学問と国家は緊張関係の側面だけを捉えて遠ざけるのではなく、もっと深い関係を築かなければいけないと思うのです。そして政治学と技術の往来が大切だと私は信じています。私は地域研究者として、こういう感覚を持っていて、これを継承したいなと思うのです。きっとそれができるのはSFCだけではないかな、と思うのです。

KEIO SFC REVIEWさんからいただいた往復書簡のテーマは、重要ですが、このテーマに答えるために、思索を文字化することに非常に苦労しました。普段、こうしたテーマを他人と話をすることはないですから。躊躇しながら文字にしました。宮本さんを巻き込んでしまい申し訳ないです。

私は、宮本さんの研究領域は国家との距離感を保つことがとても難しいのだろうな、とずっと思っていました。私とは、また違う世界を見ておられるのだろうと思っていました。いただいた書簡を読むと、やはりそうだったのだな、と思うわけです。私も同じことを宮本さんに尋ねてみようかな。宮本さんは、教育活動において、何か気にかけていらっしゃることはございますか。

二〇二四年六月二十一日

加茂 具樹

五十年前の日本社会が直面していた「課題」も、いまの「課題」も同質です。「課題」に注目することで、日本社会の中国への関心の実態を理解することができます。

こうして地域研究の政策研究という側面が、ぐっとみえてきます。本往復書簡の主題である「学問と国家」です。研究者と国家、研究者と政策、研究者と政治とのあるべき距離感とはどのようなものか、という議論に回帰します。

地域研究、少なくとも中国研究においては、国家との関係がとても近いことは不可避です。運命付けられているように私は思います。ですから、私は両者の間の緊張関係をよく理解しておく必要があると思います。しかし、緊張関係を過度に強調し、学問から国家を遠ざけること、学問（私の場合は政治学）が政策を取り扱うべきではない、と主張することはできないでしょう。

前回の書簡で私は、政治とは「価値の権威的配分の過程」という言葉を引用したと思います。この言葉の意味は、もし人々が、現状の社会のあり方に疑問があり、それを変えようとするのであれば、その役割は政治にある、ということでもあります。

政治と同じように社会を変える力があります。技術です。新しい技術です。人類の歴史、発展は新たな技術の登場によるイノベーションによって支えられてきたことは、周知のとおりです。たまたま最近目を通した本にアセモグルとジョンソンの『技術革新と不平等の1000年史』があります。同書は、技術革新と不平等の関係について興味深い議論をしています。新しいテクノロジーの発達と生産性の向上は、一部のエリートにとって有利な配分をもたらす。そうした仕組みを正し、そこから脱するためには、ナラティ

加茂具樹さんへ

ありがとうございます。やはり地域研究では教育においても様々なことをお考えの上、進めていらっしゃるんですね。お送りいただいた書簡の中で、特に、「過去の『課題』は、現在の『課題』をかたちづくり、未来の『課題』の有様を規定します」という点が印象的でした。自然科学である気象学においても、先人達が残してくれた研究成果を基に、現在の課題すなわち未解明な点を解決していきます。ただ、現時点での全ての未解明点を解決できる訳ではなく、現在行う研究を礎に未来の研究が生まれることから、加茂さんがおっしゃる点と類似していると感じました。

「教育活動について気をつけていること」とご質問いただきありがとうございます。私が授業や研究会で気象学を教える限りにおいては、国家を意識することはあまりありません。ただ近年、先に少しご紹介したように、地球温暖化や集中豪雨、台風への対策のために、人工的に気象や気候を制御しようという試みが活発化しており、ここには注意を払っています。これはまさに加

茂さんがおっしゃった「社会を変える技術」の一つになり得るものと思います。

この取り組みにおいては、そもそものようにすれば気象現象を制御できるのかという技術的な点に加え、本当に制御して良いのか、もし想定と反対の結果になってしまったらどうするのか、というような法的・倫理的な課題も多く残っています。そのため、私が担当している気象学の基礎を学ぶ学部での授業や、気候変動のリスクを学ぶ大学院の授業でも、切り口は異なりますが、こうした点をグループワークによって学生間で議論する時間を設けています。グループワークでは多様な意見が飛び交い、これは授業に参加する学生さん達の背景・専門・興味が異なり、ある程度自分の意見を伝えることに長けているため、毎回議論を行う度に、このように充実した議論ができるのはSFCならではと感じます。こうした複合的な課題を解決していくには、様々な専門性（視点）を持った人達が結集し、議論を交わす必要があると改めて認識することができます。

具体的に気象・気候の人工制御に関わるリスクのうちの一つは、その技術が確立した際に、必ずしも平和目的、つまり集中豪雨や台風の強さを弱める目的に使われるとは限らないという点です。膨大なエネルギーを伴う台風の強さや進路を制御することができれば、軍事目的に利用されてしまう可能性があります。例えば、学生さんも我々研究者も、どうやって人工制御をすべきかと科学・技術的な考察を深めていくと、知らず知らずのうちに、将来的に軍事活動に貢献することになるというのを理解する必要があります。この意味でも、学生研究のテーマを選ぶ際には、将来のキャリアも想定して考えています。

時に、もしその研究が実現できたら将来的にどのように発展し得るのかなどを考えて選択するようになるのではと思っています。この人工制御のテーマ以外にも、気象学・気候学の研究成果は、防災や産業にも貢献できることから、単純に研究自体を制限してしまうのはどうかと思います。ただ、上述のようなリスクもありますので、指導教員も見守りつつ、学生さん自身にも、研究テーマの持つリスクを理解しつつ進めてもらいたいと思っています。この過程は、将来的に気象とは異なる分野に進んだとしても、きっと様々な場面で役に立つ経験になるのではと考えます。

先の書簡で、加茂さんが「研究者と国家、研究者と政策、研究者と政治とのあるべき距離感」とおっしゃった点も印象的で、これこそ私が実践できていない点と感じました。現時点では、事実、つまり研究で明らかになったことを、矛盾なく科学的な魅力を含めて伝えることを最も意識しています。これは、私自身も学生時代に伝えられたことがなく、自然科学においては、こうした距離感を伝える必要がないと考えてしまっているためです。ただ、上でご紹介した人工制御の課題などは、この「距離感」について教員からしっかりと伝えるべきで、例えば近年注目を集める人工知能についてもそうですが、科学を学ぶ際にはそれに付随する倫理もしっかりと学ぶ必要があると思います。

今回の往復書簡の企画では、文章でやり取りをさせていただく形で、テーマがテーマだけに細部まで非常に気を配りました。私が日常的に接している科学的な内容の文章の場合、事実（現在の人類の理解）と課題（未解明な点）を明確に分けつつ、過不足なく伝えられるかなどといった点を意識して書くことが多いのですが、今回は

歴史的にも、気象学は戦争と深く関係しています。過去の戦争においてターニングポイントになったような戦いで、上手く気象を予測できていたために勝利した、というような事例（伝説）が多く存在します。三国志でも気象の影響を示唆する内容があったり、近代でも第二次世界大戦のノルマンディー上陸作戦で気象予測が決行の判断に重要な役割を担ったという話もあります。そのため軍事的にも気象情報（データ）は重要視され、実際に第二次大戦中は、日本国内で天気予報は一般に公開されていませんでした。また、現在雨を捉えるために必要不可欠なレーダーの技術も、そもそも遠くを飛行する航空機を捉えるために開発が進んだもので、気象学ではこのように軍事目的で発展した理解や機器が存在します。

一方で現在では、気象データの平和利用が進んでいます。各国で日々観測される気象データは、様々な国の中で共有されて、天気予報の精度向上に大きく貢献しています。そもそも気象・気候の状態は、国境のような境目はなく地球全体で連続的ですので、自国を対象とする天気予報の精度を向上させる目的でも、世界中での観測データが求められます。ただ、人工衛星やレーダーなどはコストも高く、制度的にも自国以外に配備するのは現実的ではありません。そこで、各国が測定したデータは他の国々と共有され、お互いの国々での天気予報の精度向上に大きく貢献しています。

少し長くなってしまいましたが、このように気象学にも国家と関係が深い点があり、私の授業では気象・気候の人工制御ということを中心に、メリットとリスクの両方が存在し、使われ方次第では非常に高い危険性があることを各自で考えてもらう機会にしています。そうすることによって、学生さん達が自身の研究内容を決める

特に別の意味として捉えられてしまわないかなどを意識して、慎重に書き進めました。こうした点は、加茂さんの文章からもすごく強い意識を感じ、参考にさせていただきました。話題を提供する側ながら、視野を広げる貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

二〇二四年七月一日

宮本 佳明

SFCにはアートがある。アートは、しばしばデザインと比較され、作り手の個人的な美的価値を追求することに重きを置いた自己表現であると説明される。しかし、アートは同時に、社会へのメッセージや影響力も持つものである。物事を総合的に捉えることを重視し、多様な分野での実践的な学びが行われるここSFCでのアートとは、一体どのようなものだろうか。脇田玲先生と鳴川肇先生を訪ね、SFCでの制作活動や、アートと社会の関係について、ざっくばらんにお話いただいた。

SFCのアート

SFCの / と 社会

SFCの / と 社会

SFCの / と 社会

脇田 玲
(わきた・あきら)

環境情報学部教授。

専門は、ビジュアライゼーション、幾何モデリング、スマートマテリアル。

鳴川 肇
(なるかわ・はじめ)

環境情報学部准教授。

専門は、建築、プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、ファインアート、幾何学、透視図法、地図法。

SFCの / と 社会

● 美しさへのプライド

——研究会の活動について伺います。研究会で一押しプロジェクトは何か。

鳴川肇先生（以下、鳴川）一押しとして挙げるなら、昨年のプロジェクトで、僕が学生の時から研究していたテンセグリティ構造（注1）の作品をTHE NORTH FACE や ISSAY MIYAKE の店頭に設置するというものがありました（写真1）。すごく大変だったんですよ。ミラノ、ニューヨーク、ロンドンなど、海外に作品を

送ることが多く、小包を作るのにもてこずりました。結局、部品を半分ずつ梱包して送り、研究会で作成したマニュアル動画を参考に現地の店員さんに組み立ててもらいました。

脇田玲先生（以下、脇田）鳴川さんは、大学では授業や研究室を担う一方で、「鳴川肇」という個人としても活動しています。特に外部のブランドとコラボレーションする時は、研究室の活動でありながら、鳴川さん自身の大切なプロジェクトでもあるわけです。研



写真1

究室とご自身のプロジェクトという二つのもの間で、どのようなバランスを取っているのか伺いたいと思っていました。

鳴川 研究会は、「鳴川研」と僕の名前を冠して活動しているわけですし、しかもその作品は研究会やキャンパスの外部で発表しますから、クオリティのコントロールは非常にシビアに行っています。学生に相談しながら進めるけれど、最終決断は僕がズバッと下します。多数決は絶対に取りません。みんなでアイデアを出し合っても、多数決で民主主義的に決めて、あまりクオリティが高くないというのは好きではありません。

だから学生は、僕の名と方針のもとで作品を作っていきます。それでも、学生自身でクリエイティブに考える場面も十分にありまわっています。デザインアトリエの所長と所員の関係に近いかもしれ

れません。

脇田 プロジェクトマネジメントは学生にさせていますか。それとも、鳴川さんが主導していますか。

鳴川 学生ができるようになってきました。制作の過程で外部の会社やブランドとのやりとりが頻繁にありますが、企業の担当の方方は最初はやっぱり僕にメールを送ります。「担当はこの学生です」と紹介しても、なかなか学生を信頼してもらえない。ところが、プロジェクトを進めていくうちに、学生が担当者の方々からものすごく信頼を得て、直接やりとりをしながら協力関係を築くことができました。ということが何回かありました。とはいえ、できない子もいますけどね。

脇田 僕の研究室ではそうはいかない。

鳴川 でもそんなものだと思います。マネジメントが上手な子は、結局自分の参加しているプロジェ

クト以外の進行にも入ることになりがちです。

脇田 忙しい人に仕事が集まるという世の中の鉄則が研究室の中にもある。

鳴川 それは村井純先生（慶應義塾大学名誉教授・元環境情報学部長）に教わりました。忙しい人こそ仕事を振る。

脇田 ここまでのお話を聞いてみると、鳴川研究室は、一つのスタジオであり、バーチャルカンパニーでもあるようですね。大学の研究室でありながら、卒業して社会に出た後にデザインスタジオでも通用するような現場での実践に重きを置いている。

鳴川 そうです。それが鳴川研の面白いところです。もちろん、教員として気を付けなければならぬ点もあります。学生を安い労働者と考えるはいけない、とかね。

脇田 やりがい搾取などと言われてしまうこともあるので難しい。

鳴川 二種類の学生がいます。「就活がありますから」と身を引いていく人と、他の授業の単位を取るのも忘れて鳴川研のプロジェクトに没頭してくれる人。どちらが未来の人材としていいのかというと、後者のような人が望まれるという人たちは、美に対するプライドのようなものを持っていて、

中途半端なクオリティを許せないんだらうと思う。そういう学生を見つけるのが、僕は好きです。**脇田** インターンやアルバイトで早くから社会に出て、授業や研究会は最小限の労力で自分の作業を節約してうまくやっていく。慶應にはそういう子が結構多いのは事実です。その一方で、全身全霊で向き合うものを見つけ、その営みの合間に授業に出て、そしてまた研究室に戻ってくる、そんな学生もいます。私はそういう学生を見ていると応援したくなってしまいます。

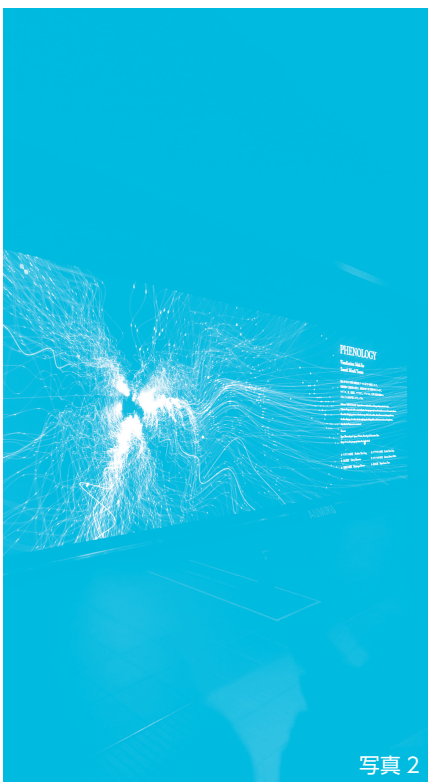


写真2

● 異質な存在

脇田 たまたま研究室の思想とは違うところに視座を持っていて、脇田研の中ではあまり高く評価されなかった学生が、社会に出たらものすごく活躍することもあります。私は二十九歳でSFCの専任講師になって脇田研を立ち上げました。最初の五年くらいは自分のクローンを作ろうとしていました。同じ美意識やスキルセットを持ち、同じような立場で活動する学生を。でも、十年目くらいだっ

ていた卒業生が、実は社会に出て輝いていることに気がつきました。そこからは、自分と異質な存在を育てることを大切にしようになりました。学生との対話を楽しんで、私が彼らから多くのことを吸収し、彼らも私から何かを得られる環境を目指しました。異質さが大切だということの気づきですが、デザイン研究から現代アートに活動を移した原動力になりました。アートは個人の特異性やユニークネスがとっても大切です。他人とどう違うかということに、価値

を見ようとする。少し自分からは距離があるなど感じるものに対し、それをどう理解しようとするのか。そのような対話を試みる行為が広義のアートではないでしょうか。

研究室の運営については、鳴川さんと似たようなアプローチを取っています。アーティスト「脇田玲」として社会で活動しながら、そこに学生を巻き込むようにしています。つい先週終わったプロジェクトは、三菱電機統合デザイン研究所と共同研究をし、その成果を作品化して、札幌国際芸術祭2024に参加しました。気候変動のビッグデータを映像や音に変換するプロジェクトです（写真2）。この作品では、鑑賞者もスキャンされて作品の中に投影されます。気候変動についての作品を見ているようで、実はその気候変動データを見ている自分を見ている、という作品です。脇田研の学生たちは、三菱電機のデザイナー

と協力しながらソフトウェアを開発し、サウンドをデザインし、札幌の現場で夜遅くまで設置し、一週間の展示を全うしてくれました。このような場では、コンセプトメイキングやクオリティコントロールは私がやりますが、学生のアイデアはできる限り採用するように心掛けています。

●SFCのアート

——他大学の芸術学部などでは一年次からカリキュラムがしっかり組まれているのが主流ですが、そうではないSFCならではのアート活動やカリキュラムについて教えてください。

脇田 僕は東京藝術大学大学院で修士課程を修了しました。美術研究科建築専攻に所属していましたが、他の専攻の人たちが何をやっているのかは卒業制作展でしか分かりません。それでも当時から、授業の課題以外のプロジェクトを自分たちで立ち上げて、インスタレーションを作ったりするこ

とはありました。若者は定められた分野からはみ出る力を持っているんだと思います。

SFCには建築学科、プロダクトデザイン学科などの学科がなく、XDという先端領域デザインの分野（注2）は「こった煮」です。立体と平面を行き交い、フレ



脇田玲先生

キシブルに学べる環境です。XDの「X」には、分野横断的な掛け合わせという意味もありますからね。

脇田 そこが一番違うところですよね。既存の産業に紐づいていないというか。ゼロからイチを生み出す環境ですよね。何が起る

か、何が生まれるかは分からない。歴史を振り返ってみても、これはアートなのかという議論が巻き起こることで、新しいブランドが次々とできていきました。それを意図的に生み出すためにXDはあります。

脇田 研究会一つひとつに小宇宙がある。そして、XDレビューという合同の講評会では、各研究会の学生が一堂に会し、複数の先生が見て意見交換をする。これはすごくよく機能しています。

芸術学部だと、デッサンや基礎造形などの授業を段階的に履修するようにカリキュラムが組まれているけれど、SFCにはそういうものはありません。それは教員の数が少ないから。授業の数が多くないのは仕方がないけれど、研究会ですごくプラクティカルな課題を解いていくうちに、総合力は確実に身に付くはずですよ。授業で短期間には覚えられない大切なことを学ぶことができる。

脇田 デジタルアートの現場では多くの時間をケーブルの処理に費やすのですが、そんな泥臭いことは知識の伝播を目的とした従来の授業では学ばないのです。実際に展示を経験することで、制作時間のほとんどがケーブルの処理で潰れること、そしてその作業を丁寧に進めることの大切さを知ります。あとは「まず挨拶」とかね。全ての人に礼を尽くしてプロジェクトを牽引していくことの大切さも実際の現場を通して学ぶことになる。

脇田 プラクティカルに制作をしていく過程で、全然アカデミックではないことをたくさん覚えていきます。「スパナが入らない位置にボルトがあると手で締めることになるから地獄だ」とか。そうすると、それを前提に初めからデザインをすることができるようになります。図面を描く時、迷わずボルトの位置を定められるわけです。職業訓練校みたいに使われて

しまいがちなのは良くないけれども、そういう地道な作業を通して、クリエイティブなアイデアを形にしていく際につきものである障害を乗り越えられるようになります。卒業プロジェクトでみんながのびのびやれているのは、そのような現場でないと学べないことを身に



鳴川肇先生

付けた上で、学生自身のやりたいことを自由にできるからです。

●アーティストは「仙人」ではない——アーティストとして社会で活動していくためには、制作以外にも様々なことを学ばなければならぬのですね。

脇田 学生を営業や社交の現場

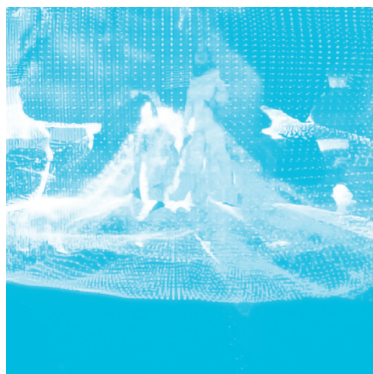
に連れて行くことがあります。鳴川先生も私もそうだと思うけれど、アーティストは全部のことができなければいけない。作ることも、営業もマーケティングも、会計も結局は全部自分でやっているんですよ。活躍しているアーティストは、おそらくアート以外のことをやってもうまくいく人たちだろうと思います。仙人のようにただ何かをコツコツ作っているだけの人ではなくて、むしろ人間関係や周りの環境の調整にも多くの力を注いでいる人たちですよ。

脇田 そうですね。デザイン系の学校に進みたかったけれど、親に反対されてSFCに入ったという学生もXDにたくさんいます。デザインやフィンアートをやるなら、脇田さんがおっしゃったように、あらゆることが一通りできないといけない。でも、それを経験すれば、広告代理店の仕事なんかは余裕でこなせるはず。本質的なものを身に付けられている

と思います。判断の仕方とか、人の説得の仕方とかね。

脇田 合意形成はとても大事。特に制作物の規模が大きくなる、予算や目指すものの認識の隔たりが大きかったり、会場の物理的制約があったり、乗り越えるものの規模も大きくなります。例えば、高価な機材を使うとなると、そのための資金をどう集めるかという話になり、資金提供者を説得することもアーティストには求められます。公共空間を利用するのであれば、行政の関係者に対しての説得も必要です。

脇田 付き合いのあるアーティスト同士であっても、コラボして制作するとすると、話しているだけでは分からなかった相手の本性が見えてくる。アートワークというものは、客観的に見て分かる機能を求められるから、はらわたに潜んでいる美意識みたいなものがあらわになる。言葉や文章に代わる言語として創作活動があ



ることは面白いですよ。お互いの美意識が共鳴するかどうかは作ってみないと分からない。うまくいかないことも多いけれど、うまくいくと愛し合う仲になれる。

脇田 私の場合、いろいろな人のコラボレーションを通して、うまくいかないケースは明らかになってきました。我を張っちゃうとダメですね。絶対こうじゃなきゃダメだと言いつつしてしまう人とは私は合わない。これは宗教みたいなもので、どこまで受容できるか、どこまで与えられるか、という部分が大きいです。お互いに

受容し合える関係になると、分野間の距離がある人でも驚くほどうまくいったりします。そして、最終的に出来るものが多くは当初に想定したものにはならない。それも含めて創造的に捉える懐の深さが自分のクリエイションの海にあるかどうかが問われますね。

●アートの社会的な意義？

——作品を作る際、ターゲットや目的を設定していますか。

鳴川 ターゲットのようなものを設定して作ろうと心掛けつつ、断念することが多いです。自分だけの世界で盛り上がっていること

にハッと気づいて。日本科学未来館のキュレーターである内田まほろさんに「作品や展覧会はラブレターなんですから、誰に向かってラブレターを書いていくかくらいは意識してください」と言われたこともあり。でも、それに囚われるとあざとい作品になってしまうかもしれない僕は思っています。

SFCに着任して最初の二、三年は、初めに問題提起があり、それに対する解決手法を考案し、そして最後に成果物をきっちり作らなくてはいけないと思っていました。その頃はその頃で学生たちも頑張っていたし、松川さん(松川昌平環境情報学部准教授)に「工学的な問いを幾何学的に解く」というキャッチコピーを付けてもらったりもしました。でもだんだんと、社会的意義や問いかけのよくなものを初めに持ち出して、そこから作り始めるという手続きはあまりにもあからさまだよなと思

うようになっていきました。昨年度、鳴川研の卒プロで、一万円札の切り絵を作った学生がいました。彼女はカッターナイフの達人で、切り絵とかゴムハンコの切り出しとかがものすごく上手です。彼女は、「レーザーカッターの限界はどこか」という問いからプロジェクトを始めて、デジタルファブリケーションの問題にまでそれを広げようとしていました。でも、無理に問題提起をすると彼女の直感や技の良さが生かされないような気がして、好きなものを自由に作ってごらんとアドバイスしました。そうしたら彼女は、印刷物で複写が難しいと言われている一万円札を拡大コピーして、四百時間かけて切り絵を完成させました。出来上がった物を見て、複製されてはならないのに、大量生産されなくてはならない一万円札というものをあえて手で彫っていくことに何か意味があるよねと皆で話し合いました。

このようにして今は、問題解決型手法ではなくて、「好奇心駆動型」を勧めています。好奇心でボールを思いっきり遠くに投げたら、思ったよりもずっと遠くに飛んで行ってしまつて、それを拾いに行くのが追いつかないというイメージです。拾いに行く過程で、本人がやっていることの意義を周りの大人たちが一緒に考えてあげた方がいい。学生が自分の心の奥底で考えていたことを言い当てられたら、もうそれで問題提起はバチツと決まり、提起した問題に合わせて最後にほんの少し微調整をすれば完成する。そういう方法に移行して、特に昨年度はすごく成功しました。

脇田 すごくいい話ですね。SFCでは「問題発見、問題解決」というキーワードをよく用いますが、問題解決なんて本来はそんなに簡単にできることではありません。納品したら問題は解決したと言えるかというと、そういうわ

けではない。どの時点で解決と言えるのか、明確に定義するのが難しい。本当はものすごく長い時間をかけて相手と向き合う必要があるのに、さらっと「問題解決」と言ってしまつてしまうことと違和感を抱いていました。SFCのみならず社会全般において、安易に問題解決という言葉を用いることが思考停止に繋がっていると感じます。それよりも、まずは好きなことを思い切ってやり、気づいたら副産物として問題が解決していたということが多いのではないかな。このようなことを私は「ミツ

ション・ドリブン」に代わるやり方として「キュリオシティ・ドリブン」と呼んでいます。鳴川さんたちが「好奇心駆動型」と呼んでいるのと同じものです。少なくとも大学という時間と空間では、自分が納得できることをやるべきでしょう。

●社会運動としての表現

脇田 現代アートやメディアアートを学校の科目に例えると、美術よりも公民に近いのではないかと。友人の小川秀明さんと話していて、そんなことに気がつきました。それは社会問題と向き合っ

ていくメディアなのです。数学や彫刻という普遍的な美を扱うアートもあるけれど、現代アートというのは社会や人間性をテーマにしている部分が多い。

鳴川 そういうアートができる、とかっこいいなとは思いますが、僕にはもう全然できない。でも、そういうパワーがアートにはありますよね。

脇田 美大(カレッジ)ではなくて、四年制の大学(ユニバーシティ)でアートをやる意味はそこにあると思います。キュレーターやプロデューサーといった立場で



鳴川肇研究会の卒業プロジェクト講評会の様子



あればなおさらです。

鳴川 芸術作品を通して何かメッセージを伝えようとするなら、そのメッセージに表現の手法が合っていて、かつ美しくなければなりません。インゴ・ギュンターの『サンキューーインストウルメント』（一九九五年）という作品があります。夜光塗料を展示室に塗りたくり、そこに巨大なフラッシュを当てて光らせる。すると、展示室の中にある人の影が壁や床に焼き付けられます。それを見た鑑賞者は、「すごい、美しい、面白い」と感じる。でも、その作品の鑑賞は、実は広島原爆投下の追体験になっている。うっかり魅了されて引き寄せられて、ハッと気づいた時にメッセージ性がすとんと頭に入ってくる。エレガントで美しいと思いました。そういうことができるといいのかな。

ます。アートの観点から話すと、鳴川さんに今お話しただいたことはその通りだと思いますし、そういう徹底した美意識を期待してしまいます。一方で、政治としてやっているのなら、また少し話は違いかもしれませんね。そのような人は、制作の前提として敵と味方を分けているはずで、敵として誰かを認識し、その誰かを攻撃したいという動機があるのでしょうか。もしくは単なるナルシズムで、典型的な表現を自分でも実現できたというちょっとげな満足に浸っているのかもしれない。かつての学生運動のテンプレートにいまだに引き継いだものはそれに類似しています。

変わリません。でも、あの歌を聴き終わった後、自然と反戦のメッセージが心に残る。鳴川さんがおっしゃったように、美しい表現に引き寄せられ、気がついたらメッセージがすっと入ってくるのです。そこがアートなんです。実力行使で何かを強制したり、暴力に訴えたりしても人は変わるものではない。寝て起きたらまた元の自分に戻っている。作品に触れた人がハッと気づき、自ら身の回りのことを再解釈する。こういうことを促す力がアートにはあります。

イウエイ）は表現の力によって中国の体制と真っ向から戦っています。あの表現力と独特なSNSでの発信力がとんでもないパワーを持つわけですよね。フィールドが政治であったとしても、メッセージの伝え方、メディアとの関わり方の中には実はアートがあります。（構成：福原衣織／松本こころ）

注1 テンセグリティ構造：tension（張力）とintegrity（完全性、統合）を組み合わせた造語。ひもなどの張力材と木や金属などの圧縮材を組み合わせることで、全体のバランスを維持する。

注2 X・D・X-Design。異端(Extreme)かつ実験的(experimental)に、領域を横断・乗算(Crossing, X)し、真の自己表現(Expression)を行い、未来の地球・社会・文化のために貢献することを目指す（湘南藤沢キャンパスホームページ参照）。

SFCの景観

「綺麗すぎる」とも言われるSFC。規則正しく並ぶコンクリートの建物は、時に私たちの気を引き締めてくれる。SFCの景観はこれまでどのように変わってきて、これからどのように変わっていくのだろう。ニュー棟DNPハウスで小林博人先生と石川初先生に語ってもらった。

石川 初
(いしかわ・はじめ)

環境情報学部教授。
専門は、ランドスケープアーキテクチャ、地図学。

小林 博人
(こばやし・ひろと)

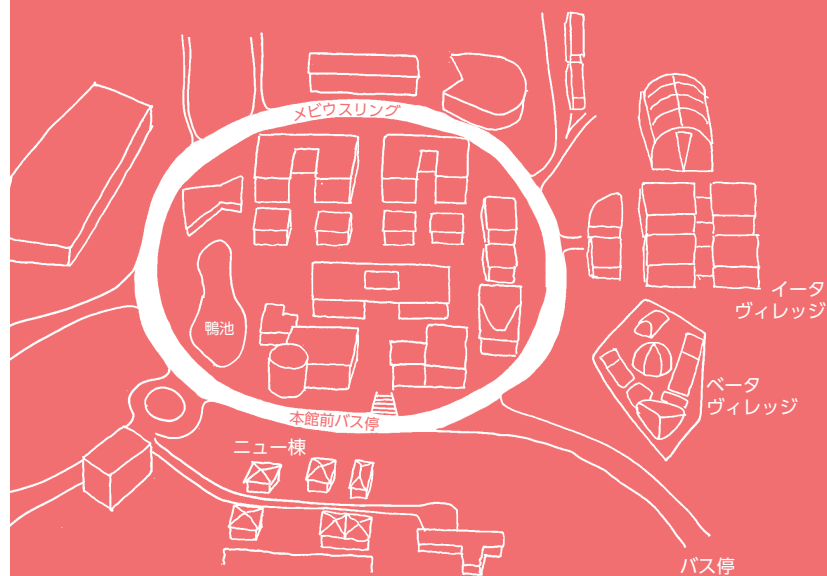
政策・メディア研究科教授兼
環境情報学部教授。
専門は、建築・都市・地方デザイン、まちづくり。

【事前知識】

メビウスリング：バスが通る環状の道。

メビウスリングの中にはSFCの主要な建物が集まっており、キャンパス内のメインエリアとなっている。メビウスリングの外には、SFC中高、大学院棟、クラブハウス棟、グラウンド、体育館、学生寮、滞在棟、ゲストハウス、特別な機材がある研究棟などが存在する。

ニュー棟：五つの研究棟が集まったエリア。小林博人研究会、石川初研究会もニュー棟の建物で活動している。「慶応大学本館前」のバス停から、メビウスリングと反対方向に進み、林の中の獣道を歩いていくと見えてくる。



● 知られざるSFCマスタープランの没案

先生方は現在のSFCの景観を、建物、人の動き、植栽なども含めて、どのように捉えていますか。

小林博人先生（以下、小林）景観とは見栄えのことかと思われそうですが、今日は中身の話にも触れないと意味がないと思います。景観を、その中のコンテンツ、例えばもともとの場所の意味や時間の流れも含めた意味合いで捉えて、話をしたいですね。

SFCは、三十年前にここに新しいキャンパスを作ろうと決めてから、本当に何も無い場所、ゼロから計画を立てて出来上がりしました。設計の基本となるマスタープランを構想したのは建築家の榎文彦さんですが、どうやら当初の計画では、今K&Lの（カッパ館、エプシロン館、イオタ館、オミクロン館）の教室棟や研究棟があるところに、横に長い建築が置かれ

る計画で、建物の数は少なかったそうです。それを見た加藤寛初代総合政策学部長たちが「もっと村みたいにしてほしい」と言っていて、小さい建物が散らばっている今の形になったと聞いています。

キャンパス計画の中で僕がいいなど思うのは、建物間の隙間がたくさんあるところです。小さい建物を出たり入ったりしながら、見える景色や歩く場所の高さが変わっていく。違う建物に移動する時にいろいろなシーンがあるのは、豊かなことです。これが三田キャンパスだったらそんな悠長なことを言っていられません。周りも含めて豊かな自然があるSFCで、そういった隙間を最初に作っておいたのは正解でした。

だけど、その隙間が有効に使われているかというと、正直そうとも思えない。有効にというのは、効率的にということではなくて、素敵かどうかという意味です。大切なのは、建物と隙間を含めた全

体が有機的に使われることです。

石川初先生（以下、石川）一人の建築家によって設計されたSFCは、統一されていてルールが分かりやすい。全ての建物が同じスタイルでコントロールされていて、言ってみれば理解が楽な風景だなとも思います。

榎さんが巧みなのは、キャンパスの中に見ると人工的な空間ばかりのように見えるのに、全体では既存の地形を上手に利用しているところ。ここはもともとと谷戸と呼ばれる、谷が奥まで入り込んできている水田と畑の地帯でした。その土地の起伏などを無理せずに使って、キャンパスの象徴的な景観に転用している。計画に破綻がないんですね。

● モダンイズム建築と「隙」

石川 モダンな白い建物の周りに芝生と所々の樹林帯があって、真ん中に湖がある。これはイギリス風景式庭園の流れをくむ典型的なアメリカのモダンランドスケー

プの手法で、SFCはその教科書のような作られ方をしています。

統一感が強いだけに、「隙」がないんだ。メビウスリング内に「隙」は確かにあるけれど、それほど使われていない。ちょっと外れたニュー棟なんかは割と「隙」だらけ。メビウスリング内のモダンな空間が勝手にいじりにくいのは、モダンイズム建築の思想で作られているからではないかな。SFCの建築は「模型のまま建てたみたい」と言われることがあるけれど、それは強い設計意図が隅々まで形になっているからだと思います。その一方で、ここから先は計画しないというエリアがパキッと分かれている。それがキャンパスの中の空間と周囲の森とのコントラストをなしています。

● 小林

たしかに「隙間」はあるけど「隙」がない。計画通りに作られるモダンイズム建築はルールがはっきりしているから、それを壊してしまうと、どこか「成り立つ

ていなさそうな感じ」がします。計画されていないものが入ってこようとすることを受け付けにくいのもかもしれないですね。

● 完成されたSFC

石川 その点で象徴的なのは、芝生です。芝生という植栽は、「ある程度伸びたら刈る」という管理をずっと続けることで成り立っています。雑草がなく、ある一定の長さに刈られている状態が最初に想像されていて、その完成された状態がずっと維持される。刈り続けるしかないんだ。森や草原のありようとは違います。パンフレットに掲載されるSFCの風景は、手入れされた芝生と建物がセットになっています。少しでも手を緩めると、「ここだけ草が生えていくけれど、どうしたの？」ということになってしまう。コロナ禍で芝刈りの頻度が落ちた時に、途端にキャンパス全体が無精髭みたいなことになった。それはそれであんなに良かつたけれど、少なく



コロナ禍で手入れがされなかった芝生の様子

● 小林

建築は、芝生と違って、二百年も三百年もずっと同じかという、きつとそうではない。そういう意味では、木造の建築は、一番変化しやすい自然素材で出来ていて、改築もしやすい。変化を受容できるんですね。一方でコンクリートはというと、比較的長い寿命を想定して使う材料で、そう簡単に朽ちたりしない。しかも、SFCのコンクリートは、改修時に外側も綺麗に塗り直して補修し



いう提案をしたら、大学側はうんと言ってくれました。学生からの提案でしたが、背景は少し複雑です。昨年二〇二三年に開校した学生寮イータヴィレッジの計画が二〇〇八年から未来創造塾という名前で進められていて、二〇一五年のSFC二十五周年記念に合わせて開設されるはずでした。それがリーマンショックなどの影響で頓挫した（編集部注・詳しくは本誌第七十六号「特集イータヴィレッジ」國領二郎先生のインタビューをチェック）。寄付金も集まっていたのに、まだ何もできていない。このことに、義塾としてもSFCとしても困っていました。学生の方から、結局大学側が未来を決めてしまうのではなく、せっかく新しいキャンパスを作るなら自分たちで作るべきではないかという声が上がリ、それがちょうどうまい具合に噛み合ってSBCが始まりました。

石川 そうやって仕組みをうまくハックするのが、すごくSFC的だと思うんだよね。

小林 SBCパビリオンは松川昌平さん（環境情報学部准教授）のチームが中心になって設計をしました。オープンな四方ガラスの建物で、福澤諭吉先生像前を歩いていると、内部の様子が見える。通りかかった時に、「ちょっと寄ってみようかな」と思える心地の良い場所でした。

石川 あれは良かったですよ。SBCパビリオンはメビウスリング内で唯一の縁側のある建物でした。新生生のガイダンスの日には、新入生が自然に縁側に集まって腰を掛けていました。ああいうのは、定期的に出現してほしい。

二年間の仮設とは決まっていたけれど、SBCパビリオンに集まる習慣が出来ていたから、せっかくなのでやっぱり残したくなりました。そこで、建物の形をかたどったデッキを残すことを提案して見たんだ。法的に可能な方法をいろ

いろ考えたけれど、現状復帰という決定は変わりませんでした。

小林 職員や教員の中でも、SBCの活動に対して「SFC的ですごいよね」と言ってくれた人がいる一方で、「何勝手にやっただよです。この件に限らず、何が起きると必ず両方の考え方がいるでしょう。大学はどちらかというと後者の側になるだろうし、その方向に向かおうとする先生方が仕切っていると、すぐに元に戻してくださいということになる。

石川 現状や統一された空間の指示を壊してはいけない。このルールがとても強いんだよね。一方で、仮設だったらできることもある。

小林 仮設は二年で壊さないといけないという制限はあるけれど、うまく使えば二年でもいろいろなことができます。次のアイデアを持ってきて、また二年やれば

ているから、なおいつそう最初の計画通りという感じがする。けど、あのコンクリートの建物ですら、時間が経つと外部の自然や人に馴染むはずですよ。使い方によってはもっと早く馴染ませられるかもしれない。自分が何年も過ごさずキャンパスなのに、「いつもなんだかよそよそしい」とか、「キャンパスにはあまりいたくない」、「冷たく感じる」とかと思うのは非常にもったいない。キャンパスでの生活に慣れてきたら、ぜひ建築にも触れてほしいです。建築に馴染みそうなものをくつつけたり寄り添わせたりして、「建築」と「何もないところ」の間そのものが景観に加わるようなきっかけを作ってみてほしい。そうすると、今は近寄りたいたいと思っているキャンパスの建物も、時間が経過するにつれて、もっと身近に感じられるようになる。国立代々木競技場のように、五、六十年経つと、コンクリートの建物であってもだんだ

ん身近になってきます。

ニュー棟は池田靖史さん（元政策・メディア研究科教授）が十五年くらい前に設計して建設された木造建築です。「隙間」もあれば「隙」もあって、居心地が良いとみんなが感じています。メビウスリング内の教室棟とは作り方も違い、本当に生活感満載です。シャワールームがあったりね。たくさん「隙間」があって、その中で利用者が空間に対して働きかけやすくなっている。これが、居心地の良さの理由かもしれません。デザインの観点で見れば、メビウスリング内の建物にも一階に吹き放しの開放感のあるピロティなど、豊かな空間はたくさんあります。メビウスリング内でも利用者が空間を変えられるようになるきっかけを作りたいですね。

●キャンパスど真ん中のSBCパビリオン

——二〇一五年にSBCパビリオン（注1）がメビウスリングの中

にあったのは「隙間」の活用という点で象徴的な取り組みですが、当時のことを教えてください。

小林 二〇一四年からSBC（スチューデントビルドキャンパス）という活動が始まりました。当時は毎週木曜日に「カンガク会議（注2）」にみんなで集まっていた。SBCの場所は、キャンパスの外れ、現在のベータヴィレッジの場所（未来創造エースト地区）と決まっていた。でも、学生も教員もその場所のことはよく知らない。そこで、初めての活動はキャンパスのど真ん中でやろうと、メビウスリングの中に最初のSBCパビリオンを建てることになりました。しかし、このキャンパスは既に建築の容積をいっぱいいっぱい使っていて（注3）、なかなか増築できない状態です。キャンパスの中心に恒久的な建物は残せません。だったら、二年間の仮設建築でもいいから、みんなで話し合う場を作りたいと

いいのだから。SBCパビリオンは、そのいい例です。日本の建築は仮設的で一度建てたらずっと建ったまま、というものではありません。そういう意味ではSBCの建築の作り方は日本的なのかなとも思います。

●一歩外に出てみると

石川 SFCのシンボルとして綺麗に大事にしたい部分はある。オメガ館の壁に大きくスプレーで落書きがされているようなことを望む人はいません。一方で、パビリオンを建てたいというような思いもあるから、そこは使い分ければいい。メビウスリングの外にいろいろとやれるエリアがあるのだから、ルールと場所を上手に使いたい。そのためにSFCはこんなにも広いのです。

小林 ベータヴィレッジがある土地はもともと、今のイータヴィレッジが建った後に滞在型教育施設を作るはずの場所で、ひとまづは空地のままにする予定でした。目ができただけ、その前庭にひまわりを植えた学生が大学から怒られたんです。勝手にランドスケープに手を入れるなど。大切なのは、それなりの時間をかけながら少しずつ説得していくことです。ちょっとずつ、ちょっとずつね。今は、ひまわりを植えるのが怒られませんよ（笑）。



だからあの場所を使わせてくれました。マスタープランから建築まで、学生が全体の発案をし、七年くらいかけて建物を一つずつ作っていきました。ベータヴィレッジは、学生、教員、職員、OB・OGが主体的に作っている場所です。あそこで起こることはメビウスリング内で起こることとはまたレベルが違って、ある種の自由を許容してくれます。



小林博人先生

●経済的な状況が変わった

石川 ことでSBCができたという側面もあって、それはある意味ではラッキーだったと言えます。お金で何もかも解決できる状況だったからイースト地区は現在のベータ

思ってもらえると、次からはもっと柔らかくなる。失敗すると、もう絶対ダメだと言われてしまうけれど。メビウスリング内のモダニズム建築はなかなか触りにくいで、ニュー棟やベータヴィレッジといった周りから始める。周りでやっていることが少しずつ浸透していけば、内側も変わるはずですよ。だから、僕はそんなにネガティブに考えていない。慌てなくても、誰かが少しずつ企んでいけば、なかなか手の付けにくい空間だって変わるはずですよ。

●制度の「隙間」に入り込む

——これまでのお話に出てきた、却下、許可といった判断は誰がしているのですか。

石川 どのレベルの決定かにもよるけれど、SFCでは、職員と



ヴィレッジではなく、コンクリートの大きな建物で占められていたかもしれない。また、イースト地区は、大学の所有物ではない借地で、しかも、メビウスリングの外にあります。こうした様々な要因が絡み合って、思い描かれていたようにいかなかったために、むしろいろいろと試すことができた。メインのキャンパスの思想から少し離れて、隙間やゆとりを作って、キャンパスをハックした



石川初先生

というふうにも言ってもいいよね。ベータヴィレッジでは、例えば紙の管でできたドームやベニヤを貼り合わせた棟、個室を積み上げた棟など、実験的な建築がいくつも

教員の中から、様々な意思決定をする委員会がその都度組織されます。でも、多くの委員会は運営のための細かい判断をするところ、そこでSFCの大きな方針が決まるわけではない。大きな方針は、必要に応じて決まっていくんだと思うよ。逆にいうと、決まることが起こると委員会が集まって話す。

●それも「隙間」の話に繋がります

小林 それも「隙間」の話に繋がります。委員会など様々な組織や会議があるけれど、その中でのことが決まっていく状況は、言ってみれば「隙間」ですよ。そういう時に学生の方から何かやりたいと提案すると、「隙間」にうまく入って実現することもあ



建てられました。「建設費が限られていたから」と言いながらも、普通では試せない、攻めたデザインができたのです。

●メインのキャンパスの建物では絶対に許してくれないでしょうね（笑）。

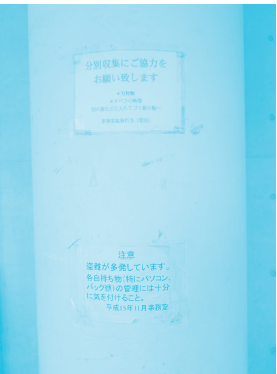
石川 棟がいくつか建ってきた時はあまり草刈りもされず雑草が伸び放題だったこともあります。キャンパスの他のエリアと同様に芝刈りをしてもらうかとかいう話になった時には「せつかくだから、放っておいたらどうなるか実験したい」という声が上がって、業者による芝刈りをしないことになりました。普通だったらキャンパスでそんなこと提案しないでしょ（笑）。増えやすい帰化植物だけを抜いて、草原のような場所づくりの実験を二年くらい続けている区画もありますし、松川研では自動草刈りロボットを作ってみました。

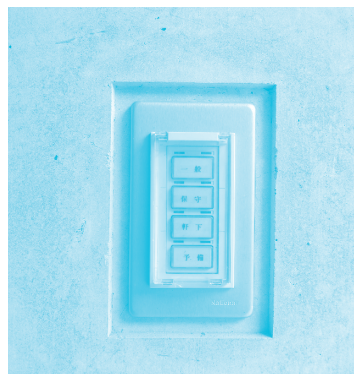
●ベータヴィレッジに棟

る。SFCではそういったことが非常に起こりやすい。学生が自分たちでキャンパスに対して何か働きかけようと発想できることが、慶應義塾の中でSFCが持つ大きな特徴ではないかな。

●まずはキャンパスを知る

石川 学生のみなさんは意外と





弁当は空き教室で食べられます。

2022.4.6 - 発行日

● やっとひらかれた森
 — 今のSFCの植生をどのように評価しますか。

石川 周りの森林は、もっと明るい雑木林や開けた草原でもいいなと僕は思います。

小林 プロテクトするという目的で作ったから、その面ではまさに成功しているけど、やっぱりキャンパスが閉じてしまっているのは残念ですね。これだけ面白いことをやっているのに、周りの地域の人が入ってきづらい状態になっている。

石川 学生や教職員は「都会からSFCに来て都会に帰る」みたいになっている。それもキャンパスの作り方そのものが、田園地帯の中のキャンパスというよりも、都市のサテライトのように作られていることが一つの要因ではないかな。その意味で、ベータヴィレッジやイータヴィレッジがその森の外にできたのは革新的です。

キャンパスのことを知らないで、仕組みや空間のありようをよく知ってほしい。例えば、あの辺りを漁りに行くと思えそうな粗大ごみがいっぱいあるとか、この辺りは中高生がたくさんいるとか。ネットでSFCを検索すると、キャンパスの内側から撮った写真しか出てこない。けれども、SFCは地域の中で大きなプレゼンスを持っていて、遠藤や茅ヶ崎、寒川の方から見たキャンパスの風景もあります。そうしたことに気づいてほしいですね。

周囲と縁を切ってしまったのは、今のこのキャンパスの特徴です。キャンパスの外周部は、いわゆる鎮守の森のようなうっそうとした樹林が短期間で出来上がる植栽方法で作られています。この濃い緑はもとからあった森じゃなくて、造成した土地に人工的に作られたものなんだ。潜在自然植生方式を提唱された宮脇昭さんという先生の指導で進められたそう

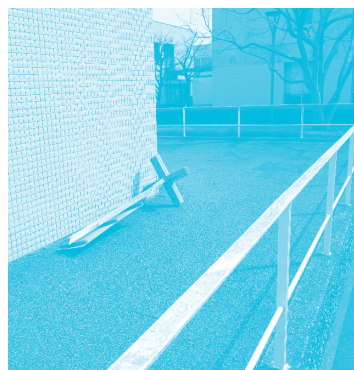
す。ニュータウン(注4)が北に拡大して周りの地域が都市化しても、SFCの環境が守られるように考えたのかもしれない。SFCのランドスケープを担当された田中喜一さん(注5)にお話を聞いたことがあります。榎さんも田中さんもそこにはノータッチだったそうです。三十年経って、今SFCの周りは大きく育った常緑樹が密生して、外から見ると古墳みたい

だから、ベータヴィレッジやイータヴィレッジが外と繋がっているのはすごいことなんです。ベータヴィレッジの滞在棟1ができた時に、窓から遠藤の風景が見えたのは衝撃だった。それまで見たことのなかった景色がもたらされたんですよ。イータヴィレッジではそれがさらに顕在化している。キャンパスの外が中庭から日常的に見えている。イータヴィレッジの周りの植栽帯がもって育てて豊かになるとさらにいいな

地域のことを考えざるを得ないし、SFCを都市のサテライトではなく「地元」にしていく手掛かりにできるといいよね。(編集部注・左図は石川先生の手書きイラスト。)

小林 ベータヴィレッジやイータヴィレッジは、キャンパスを外に開くためのゲートウェイとしてだけではなく、キャンパスの中心までをも変えていくきっかけになるべきだと思います。これから周りの地域やその人々とどう関係していくかを突き詰めて考えていくと、キャンパスの内側も変わってくるはず

SFCのルールや仕組みに鬱々



編集長と副編集長の振り返り

編集しながら、やっと特集の全貌が見えてきたね。

藤

各記事が特集内で果たす役割を、事前に編集部で考えていた。そして、インタビューや往復書簡に応じてくださった先生方は私たちの意図を汲みつつ、編集部の想定をたやすく超えて議論を展開してくださった。その後改めて記事の順番やデザインについて考えられたのは良かったね。

松

複数の人たちの言葉を一冊に綴じていく、編集という作業ならではの醍醐味だな。

タイトルは「SFCの／と社会」。SFCを一つの社会と捉え、外部社会とどのように関わりながら(=SFCと社会)、どのような内部社会を形成してきたのか(=SFCの社会)を多角的にレビューする一冊を目指した。編集部が特に今、SFCを考える上で重要なのではないかと考えた五つの論点を取り上げている。

今号はデザインにもこだわった。CMYKではなく、ピンクと水色の特色を使った二色印刷。文字ばかりの特集だけれど堅苦しい印象を与えたくなかった。ポップな色合いと文章に集中できるシンプルさを両立できたかな。紙も上質紙に変えたけれど、一発勝負で刷るからまだどうなるかわからない！ いいものが出来上がるといいな。

藤

松

編集部の永遠のテーマである、「KEIO SFC REVIEWにしか作れないものは何か?」「雑誌にしかできないことは何か?」という問いを念頭に、印刷物であるからこそその制限と可能性を考え、印刷の手法にも丁寧に工夫を凝らしたね。

「SFCの自治」のSFC開設以前の歴史から振り返りSFCを捉え直す視点、「湘南自治会」のSFCの学生の等身大の視点、「SFCの景観」の物質的な変容からSFCの歴史を振り返る視点。これらの記事には共通点がある一方で、SFCの未来を考える時に、注目する点が様々あり、立場や捉え方も多様であることがよく分かるね。

藤

「SFCと国家」では、SFCとその外側との関係に着目して、「SFCのアート」では、「問題解決」や「表現」といった社会全体に通じる本質的な問題に触れながら、SFCという社会の特異性と独特な立ち位置を異なる観点から知った。

松

分野も視点も異なる議論に共通点が見られること。同じような話題でも、分野や立場によって論じ方が様々であること。まさに、SFCだ。

KEIO SFC REVIEWにしか作れないもの、という観点では、これらの記事はまさに私たちにしか取り上げられないものだったように思う。自分たちで自分たちのことを語ることは大切な。

もちろんこれでSFCの全てを概観できたとは言えない。KEIO SFC REVIEWの雑誌づくりは続く……!

編集長：松本こころ (松)
副編集長：藤田叶子 (藤)

としている学生もいるかもしれない。三十年前に計画されたものが今でもきちっと残っているから、そこに従わざるを得ない部分もあります。でも、キャンパス全体を見た方がいい。今はニュー棟も含めてガサゴソといろいろなことが起きています。がんじがらめだと思いがちなのは、中心しか見ていないからではないかな。やりたい人は何かやれるところを見つけたい。いいし、きちっとしておきたいところはきちっとしておきたい。

石川

そこで勝負しないで、ちよっと窓開けようよ、みたいな感じ。周りの森で遊ぶといいんじゃないかな。

小林

きちっとする場所と、はちやめちやにする場所との両方があるっていいんですね。ニュー棟みたいなところだけでは、ぬるぬるぐずぐずしちゃうかも。

石川

例えば張り紙を剥がされて、「そんなことも許されないの?」と思う気持ちになることも



小林

やはり熟知することが大

あるかもしれないけれど、それはまた異なる自由さがある場所もあることを知ってほしいですね。バス停からここニュー棟に来る道(左の写真)は、実は正式には作られていないんだよ。これだけたぐさんの人が通っていても、キャンパスマップには載りません。道の周りには配線不要のソーラーパネルを使った小さい照明や階段があります。それらは、ニュー棟を使う建築系の学生が自分たちのために少しずつ整備してきたものです。大学のキャンパスの面白いところは、そういうところだよ。そこを楽しめばいい。

石川

それこそデザインだよ

事、知らないで議論しているとすれ違いばかりになってしまます。だから、キャンパスで何かをしたんだったら、最初にきちんと知ること。そうすると、「あ、ここってこうすればいいじゃん」というのがふっと思い浮かんだりして、みんなで一週に問題解決できちゃうようなことが起こる。よく知って、よく話し合っ、「隙間」を見つけて解決していくのは、決して小賢しいわけではなく、本来の道筋だと思えます。

(構成：藤田叶子)

注1

SBCパビリオン…パビリオンとは仮設の展示館。SBCパビリオンでは、SBCに関連する授業で作られた制作物の展示などが行われる。

注2

カンガク会議…SFCについて侃侃諤諤と議論ができるようにと名付けられた。加藤寛元総合政策学部長の「加藤寛のカンガクガク」というテレビ東京系列のテレビ番組に倣う。

注3

一見すると建物と建物の間に「隙間」があつてのびのびとした印象を受けるSFCのキャンパスだが、敷地面積に対して建物の延床面積が占める割合である容積率は定められた限度に近い。

注4

ニュータウン…大都市のベッドタウンとして郊外に作られた計画都市。

注5

田中喜一さん…ランドスケープデザイナー。ランドスケープデザインに特化した建設コンサルタント・造園設計事務所「エキープ・エスパス」代表。

2023.11.25
2023.11.26

S F C 万学博覧会取材記

二〇二三年十一月二十五日(土)、二十六日(日)、SFC万学博覧会が開催された。例年それぞれ別個に行われているORF (Open Research Forum) や学術交流大会、慶應義塾大学SFC芸術祭をはじめ、藤沢市や神奈川中央交通との共同展示や講演といった様々な特別企画が一同に集結した。当日の様子を、写真と共に一部お届けする。



ホームカミングデイ

SFC三田会主催のホームカミングデイの様子。トークセッションの後は、タブリエで懇親会が行われた。

SFC最大の研究発表イベント。開催場所をキャンパスに戻して二年目となる今回は、前年度にも増して多くの来場者で賑わった。ポスターや展示物にじっくり目を通し、学生の説明に熱心に耳を傾ける来場者の方々の様子が印象的だった。



ORF

キャンパスの玄関口であるメディアセンター前に、神奈川中央交通のバスがずらりと並んだ。とりわけ注目を集めたのは「三太号」。石油が不足した戦中戦後の時期に庶民の足として活躍していた、代燃車と呼ばれる種類の車両だ。薪の燃焼によるエンジンの始動の実演は、カメラを構えた人々の熱い視線を集めた。



神奈川中央交通 特別展示

慶應SFC学会主催の学術交流を目的としたイベント。学生を中心に多くの学会員による発表が行われ、分野を超えた「SFC学」としての交流と情報発信の場になった。「一般研究発表」と「学会員の活動発信」のカテゴリーが実施された。



学術交流大会

二〇二三年七月の「慶應義塾大学SFC芸術祭」の選抜展として開催された「慶應義塾大学SFC芸術祭選抜展」。教室が展示空間に様変わり。会場では、審査員を務めた若手キュレーター三人を招いたトークショーも開催された。



SFC芸術祭

緑色のジャケットを羽織ったSFCの学生がキャンパスを案内する(上写真)。現役のSFCの学生との交流ブースも設けられており、開講されている研究会の紹介など、SFCの今を知るための最新の情報がまとめられていた。

オープンキャンパス



また会いましょう!

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。

しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、

それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

今回は、ドイツで修士・博士課程時代を過ごされた藁谷郁美先生に、

当時の研究テーマや留学生活についてお話を伺った。



ボン大学の文学部 (Germanistik) の図書室で

藁谷郁美

● 厳しい高校生活

——先生の生い立ちや幼少期について教えてください。

生まれたのは福井県ですが、子供時代のほとんどを過ごしたのは山口県です。多分、インパクトが強かったのは、高校時代になると思います。中学生の頃から、ヨーロッパの文化に漠然と憧れを持っていました。けれど、その時はインターネットもなく、地方にいたということもあり、未知の情報を収集する手立ては全くありませんでした。

そこで、地元で唯一あった私立高



校に進学することを自分で決意しました。そこはカトリック系のミッションスクール(女子校)でした。私が住んでいた地方では私立に行くのは進学の一般的なルートではなく、また全寮制の学校だったため、両親からは反対されました。親の反対を押し切ってもこの高校を選んだ理由の一つは、ヨーロッパの文化や言語に触れたいという思いがあったからです。また、とにかく家から飛び出して何かを一人でやりたいという気持ちがあったので、絶対に家から通えないという点にも憧れを持っていました。

自分で決意して憧れの高校に入学したものの、その寮での生活はすごく厳しかった。朝何時に起床して、何時に寝るといいうのも決まっていた。山の上に寮があり、その麓に学校があったので、毎日山を登ったり下ったりして通学していました。寮の部屋は個室でしたが、ドアはなくカーテンで区切られていました。学校から帰ってきてから消灯の時間までの勉強時間では、それぞれの様

子をシスターが監視できるようにカーテンを十センチ以上開けないといけないというルールがありました。たまたに居眠りをする、廊下で見回っていたシスターがカーテンをザッと開けて、「スペイン語訛りで顔を洗ってらっしゃい！」と怒鳴られることもありました。シスターは全員スペインから来たスペイン語を話す人たちでした。スウェーデンのポップ・グループABBAがスペイン語で歌っている曲の歌詞を教材にし、スペイン語を教えてくれた先生もいました。

高校時代で印象に残っているのは、聖書を読む会に参加したこと。その会がある時はシスターたちが住んでいる宿舎に招待してもらいました。そこには、日頃見たことのないような素敵なティーカップやお菓子、その頃は珍しかったオリーブなどがありました。私はそれらに釣られて、毎週聖書を読む会に参加していました。

ある日、わだかまっていたことをどうしても質問したくなり、日頃か

ら信頼していた一人のシスターに、勇気を出して聞いてみました。「イエスはそもそも人間だったのでしょか」という質問です。すると、シスターはそれに対しては何も答えずに、大きな声でハハハッと笑って、それで終わってしまったのです。後になって、この質問が実は神学的には核心的問いであったことを知りますが、当時はシスターが笑った理由が分からず、自分としてはとにかく大声で笑われて、恥ずかしさとかんな質問しなければよかったという気持ちと、何より、誠実に向き合ってもらえなかったという絶望感がありましたね。それをきっかけに聖書を読む会に行くことをやめてしまいました。私はシスターのことを正しき行い、正しき言葉を実行している人たちだと認識していたので、裏切られたと思いましたが、シスターに対して偽善者だと言ったりしました。今思えばシスターといえどもその問いに答えたくない、答えられない、などの人間的な弱さみたいなものがあるのは理解できるけれど、そ

の当時、未熟だった私には、そう考えられるほどの寛容さはありませんでした。こうして、聖書の学習に背を向けるような時期に入っていきました。そんな高校時代でした。

●キリスト教的な要素について追求した修士・博士時代

高校生の時は、何かとスペイン語で怒られることが多かったため、卒業してからスペイン語を学んでみようというモチベーションは湧きませんでした……。中学の時にクラリネットを演奏していたクラシック音楽に興味があったこともあり、大学以降はドイツ語を学び、ドイツ文学に関する研究の道に進みました。

私は修士号も博士号もドイツで取得しました。その時の私の研究テーマを簡単に言うと、表現手段としての宗教言語が文学作品の中でどのような機能を担うのかを究明することです。ヨーロッパ、特にドイツでは、今はイスラム教徒の人口も増えているけれど、やはりキリスト教的

している一般講義では、その部分に履修者と一緒に気づいていきたいなと思っています。

——ドイツへの留学時にはどのような生活を送られていましたか。

今では考えられませんけれど、当時は文学研究で学位を取ることを目的にする留学というのはあまりありませんでした。あの頃は、留学には行くけれども、別に学位を取らずに戻ってくる人も多くいました。そういう時代だったこともあり、独身女性が一人で二年間も外国に行くというのに対して、親には泣かれました。だからこそ、学位を取らずにおめおめ帰るなどということはできな



ボン大学（ドイツ）の研究室前で。博士号取得のための最終試験を終えた後の写真（29歳）

な思想は軸にありますよね。キリスト教的要素が社会的な背景にある文化圏で生まれた文学作品には、宗教的な言語やメタファーが使われています。例えば、目が見えないとか、目隠しをするといった表現をとっても、それらは当たり前のように宗教的な意味で使われています。しかしそういったテキストを全く異なる言語圏、文化圏の我々が読んだ時に、キリスト教的な要素までを理解することは非常に難しい。それでは、本当にそのような表現が分かったとは言えませんよね。でも、聖書やその世界観、価値観を前提にして文学作品を読めば、これはこういう意味

だったのか、と宗教的な視点から捉えることができ、分かってくるはずなのです。これは、文学だけではなく映画やコマーシャル、政治的な言論などにも言えることです。全ての言語の中に、どんなシンボルやメタファーが含まれているのかということを知ることは必要です。こういった考えのもと、私の研究では、検討対象にする文学作品の文章を全

い、と背水の陣で臨みました。修士号を取るためには、主専攻と副専攻の科目を受けて単位を取り切り、なおかつ修士論文を書く必要があります。したので、こんなに勉強したことはなかったというくらい、修士号を取るために必死に勉強しました。大学の図書館が夜中の十二時まで開いていたので、毎日毎日、そこで石にかじりついてでもやり遂げようという気持ちで勉強しました。クリスマスも図書館で過ごしました。

そのおかげで、修士論文で高い評価を頂いたこともあり、博士号もボン大学で取れないかと先生からお誘いを受けました。一年間日本に帰った後、ドイツ政府奨学生として再びドイツに戻り、博士号を取るための生活が始まりました。その時も、論文執筆が進まず試験の連続でした。というのも、ドイツ語母語話者がドイツの宗教言語について分析するのならまだしも、非母語話者の私があるテーマで論文を執筆するというのは、実は結構挑戦的なことだったのです。今思うと、文学作品に見られ

てテキストデータ化し、重要な表現を抽出して、聖書や聖典に分類されるそれぞれの語彙表現にどのような由来があり、それがどのような文脈で使われているのか、ということをし洗い出して分析しました。

後々考えると、こういった着眼点に至った背景には、先ほどお話ししたような高校時代の経験があるのかもしれません。高校生というナイーブな時期にインパクトの強い形で聖書を読んで宗教について勉強したことが、いろいろな刺激となって私の中に蓄積していったのだらうと思います。

博士号を取得して日本で研究生生活を始めた頃には、宗教的な要素を含んでいる言葉がどのように変容して理解されているのか、また、異文化間の翻訳は一体どうなっているのだろう、という疑問が湧いてきました。私はその頃、三島由紀夫の文学作品が題材となったドイツ語のオペラを日本語に翻訳するという仕事を任されたことがあります。翻訳といっても逐語的に訳すことができるわけ

る宗教的な要素に気づいて引っかかりを覚えたのも、それをスルーせずに追求することができたのも、母語話者ではない私だからこそできたことなのかなと思います。

余談ですが、当時のドイツは、歴史上の重要な転換期を迎えている最中で、まさに教科書に書かれているようなことを身をもって体験した時代でした。修士課程の頃には私は西ドイツにいて、ベルリンの壁が崩れたのは、ちょうど修士号の最終発表の時でした。その後、博士課程の学生として研究を続けているうちに、東西の再統合が起きました。

●SFCの学生へのメッセージ

——SFCでは様々な外国語を学ぶことができます。外国語を学ぶ意義はどこにあるとお考えですか。

言語が違うと、そこに込められた意味、シンボルやメタファー、視点などが全て違ってきます。伝達内容が同じでも、別の言語だと必ず違いが出てくるんです。他の言語を学ん

はなく、似たような単語であるように思えるけれども、そこに含まれる意味の範囲が別の言語では異なります。例えば、矛盾を含んだ痛さ、つまり内的な苦しみを翻訳する場合、その内的な葛藤をどうドイツ語で表せるか。そこで使われるのはドイツ語の宗教言語なんですよね。そのようにして三島由紀夫の作品がドイツ語に翻訳された結果、ミシマ作品にもととはなかったキリスト教的な価値観や世界観が出てくるのです。つまり、翻訳によって、言葉のシンボルやメタファーだけではなく、ロジック自体が変わってくるわけ

です。三島由紀夫という同じ一人の作家の文学作品が、日本語の文脈の中で理解される時と、キリスト教言語圏で受容される時とは、必ずしも意味合いが同じではないということが起きます。

そういう意味で、キリスト教的な要素を理解する、知るということは本当に大切なことだと私は思っています。ですので、私がSFCで開講

していると、今までは開いていなかった窓の景色が目の前に現れます。こんな見方もあるのかと、今まで見えなかったものが見えてきます。そこから自ずと、既習言語と別の言語とを、自分の中で比較するような相対的視点が出てきます。そうすると、自分が今まで絶対だと思っていた軸が、だんだん相対化されていくのです。自己を相対化するこの作業が私はすごく大切だと思っています。新入生に対して私がいつも伝えていることは、言語を学習する最終目標は、母語で発信できるのと同じように学習言語で発信できるようにすることだよ、ということ。また、言語を学習するにあたって、自分がその言語を使って何をしたいのか、ということをもまずは意識してもらいたいと思っています。SFCの問題発見、自己発信型の外国語教育は、受験勉強の外国語学習とは違います。ぜひ、SFC生の皆さんには自分が今学習している外国語を、自分の研究で活かせるような勉強の仕方をしてほしいなと思います。自分の研究で活か



連載

贈る言葉

今年3月SFCをご退職された先生方に、これまで長く教鞭を執られてきた中で特に思い出に残っていることやお気に入りの場所、これからのSFCに期待することについて寄稿していただいた。多様な学問領域の第一線で常に活躍されてきた先生方の目には、どのようなSFCが映し出されているのだろうか。



●理想的な履修の仕方
SFCで学ぶ皆さんにはぜひ、自分が履修した授業から学んだものに繋がりを持たせ、卒業プロジェクトでそれらを集約したオリジナルティ

すというのは、例えば、アラビア語圏でインタビューをしたり朝鮮語圏でフィールドワークをしたりなどという事です。自分の培った道具で、自分だけのデータを手に入れることができます。自分にしかできないことを自分で手に入れることができるのです。

が高いものが作れるような、そういう勉強の仕方をしてほしいと思ってます。SFCには、いろいろな専門分野の先生がいます。そのような環境で、てんでんばらばらに授業を選択すると、力が分散してしまい、せっかくの四年間を一本の幹、つまり、卒業プロジェクトという最終的な自分の集大成としてまとめることができなくなってしまう。それぞれの葉脈に水や養分がゆきわたり、やがては大きな幹に注ぎ込まれるように、そして、幹の方に栄養を全部集約させて太い幹にするために、自分の履修科目を選ぶことが大切です。例えば、ドイツの平和の意識について調べたい人がいたとします。まずドイツ語を、中上級レベルの「スキル」科目まで履修しよう。データを集めるために社会調査法を身に付けないといけないし、統計も学んだ方が良さそう。発信するののためにウェブデザインとか、社会学とかも必要な、などと考えを進めてください。そうしていくと、卒業する頃には、自分独自のキャリア

ムで作り上げた、自分だけのアウトプットを創出できるようになります。数年後には尖った自分でいたいという目標を常に意識しながら、生活してほしいなと思います。それができるのは、SFCだけなので。せっかくこんなに恵まれたキャンパスなのに、自分の恵まれた状況や環境を、ちゃんと認識していない学生が多いように感じます。

例えば就活でSFCはどのように勉強するところなのか、何が特徴なのかと聞かれた時に、自分がやりたいうことをやるためにいろいろな分野の授業を組み合わせて、自分だけのカリキュラムを作るということを実現できるキャンパスです、と胸を張って答えてほしいと思います。そのようなキャンパスで自分の大学時代を過ごすことこそが、他にはないSFCの学生ならではの特徴なのです。

——ありがとうございます。

(構成：井庭晴香)



藁谷 郁美
(わらがい・いくみ)

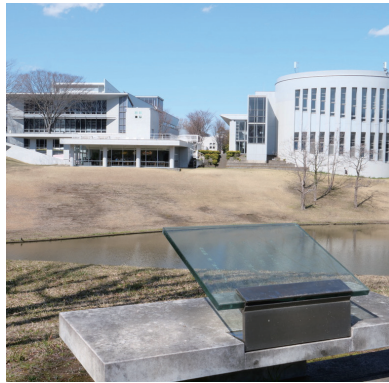
総合政策学部教授。
専門は、外国語教育、ドイツ語教育、ドイツ文学研究、ことばとメディア。



No.11
コンピュータと共に創る社会

萩野 達也 (はぎの・たつや)

経歴：1990年-1992年 環境情報学部 専任講師
1992年-2001年 環境情報学部 助教授
2001年-2024年 環境情報学部 教授
学位：博士（コンピュータ科学）
専門分野：ソフトウェア科学、プログラミング言語、システムソフトウェア、Web技術



●SFCのお気に入りのスポット
ガリバー池（通称鴨池）の一角に西脇順三郎の「旅人かへらず」の冒頭の詩の一節が書かれたアクリル板が設置されています。私は、ここから眺めるSFCキャンパスが最も好きです。この写真を撮ったのが三月なので芝生の青さはありませんが、もう少ししたてば芝生も青くなり、木々も葉が生い茂り、学生たちは芝生で寝そべったり、座って友達とおしゃべりをしたりと、賑やかな風景を見ることができそうです。また、夜に教室の照明がつくとすくすくきれいです。今、社会は目まぐるしく変わっていついて、それに置いていかれないようにみんな必死に走り続けているかも知れませんが、ときには立ち止まって自分をじっくり見つめ直すのも良いのではないのでしょうか。

●SFCの学生へメッセージ
「旅人は待てよ／このかすかな泉に／舌を濡らす前に／考へよ人生の旅人」
情報技術関連の教員として三十四年間SFCにおいて教育・研究にたずさわってきました。SFCでは一年生全員にプログラミングを教えています。一九九〇年開設のとき、理系以外の学部でプログラミング教育を全学生に行っていたのはSFCだけでした。今なら、情報社会で生きるために、情報技術の教育を全学生に行うことは不思議ではありませんが、当時はノートPCもなく、インターネットも携帯電話も普及していない状況でしたから、SFCの取り組みは特別なものでした。SFCで全学生に情報技術教育を行っているのは、来る情報化社会を予見していたこともあり、SFCの入試科目が英語か数学のどちらか一科目と小論文と、偏っていたこともその理由の一つでした。世の中の問題を解決するためには、理系文系の区別なく、すべての学問分野の用い取り組み合わせが必要であり、理系の人は英語が苦手、文系の人は数学が苦手という苦手意識をなくさせるために、数学入試で入った学生には外国語を言語コミュニケーション能力として高校

までとは違った形で楽しく勉強してもらい、英語入試で入った学生には、数学の代わりにプログラミングで論理的思考を学んでもらうのが目的でした。
コンピュータは単純な四則演算を一つ一つ手順にしたがって、忠実に実行していくことしかできません。ただ、それを高速に根気よく積み重ねて行うことで、複雑な処理をこなす、現在の情報化社会を支えています。その原理を理解しておくことは、理系文系にかかわらず、重要なことだと思います。最近では生成AIが話題になっていて、これまで人間のやっていた創造性を含む仕事までAIが取って代わろうとしています。AIもコンピュータのプログラムであり、本質は変わりません。コンピュータには何ができ、何ができないのか、どのようにして処理しているのかをしっかりと理解していることで、AIの限界や、AIの活用方法も分かります。
みなさんには、これから、もっともっとコンピュータを活用して、世の中のあらゆる問題を解決して欲しいと思っています。AIに使われるのではなく、AIより賢く、AIを使う側でないといけません。より良い社会にするために、問題発見解決できる能力をSFCで身につけて、社会に出て活躍することを期待しています。



No.10
全ては自分の意思決定次第

印南 一路 (いんなみ・いちろ)

経歴：1994年-2000年 総合政策学部 助教授
2001年-2024年 総合政策学部 教授
学位：博士（意思決定論）
専門分野：意思決定論・交渉論、医療政策



●お気に入りの一枚
場所は茅ヶ崎海岸。茅ヶ崎三田会主催の地引網大会に参加した時の写真だ。健康維持のために始めたゴルフが急激に上手くなり、地元コースで「SFCの教員にゴルフがうまいのがいる」という噂を聞きつけた慶應OBの勧めで、茅ヶ崎三田会に加入した。住所は茅ヶ崎ではなく藤沢、出身は慶應ではないが、茅ヶ崎三田会は規約を改正して、例外的に受け入れてくれた。
その縁で、研究会の懇親会を地引網大会と一緒にやった。写真は、当時始めたドローンを用いて撮影した動画から切り取ったもので、研究会の学生に自由に研究を行ってもらった成果である。ドローン

●SFCの学生へメッセージ
人生には遺伝や生まれてきた環境による不平等・不公平がある。しかし、人生には百メートル競争のように決まったゴールがあるわけではない。何を人生の目標にするかは、何が「善き人生」なのかという問題を考えることに直結している。意思決定論からみると、人生は多数の連続した意思決定の結果であり、一つ一つの意思決定は数珠つなぎになっている。他者の意思決定や突然の出来事に影響されながらも、物心ついた時から、私たちに無数の意思決定の機会があったはずだし、その中でどの選択の結果が現在の自分だ。何よりも自分の「思い（志や目標）」が重要だ。欧米では、聖書に次ぐベストセラーである『原因』と『結果』の法則』（英作家のジェームズ・アレン）を読むことをお勧めする。自分の人生を内省し、研究会の

懇親会や卒業祝賀会では、学生にいろいろな言葉を贈ってきた。SFC赴任直後には一つであったが、直近の最終講義では六つになった（アーカイブ参照）。それらを列挙して、最後に贈りたい。
一 Imagination is the only limitation. 自分が想像できるものは実現できる可能性があるということだ。想像力にブレーキをかける理由はない。
二 「自分に投資しなさい」余った時間やエネルギーがあったら、自分の能力開発と健康に投資をすることだ。特に若いうちの投資は、死ぬまでリターンを生み続ける。
三 「ひたむきな努力が最善の戦略」
四 「純粹に個人の成果など世に存在しない」社会の中で、自分一人で成果を上げることはない。必ず、制度や誰かの手助けがあったはずだ。恵まれない他者には寛容に、自分には謙虚になるべきだ。
五 「人生に失敗がないと人生を失敗する」（斎藤茂太）人生に失敗はつきものだ。失敗したら、その原因を分析し、何を学べるかを考え、さっさと頭を切り換えよう。
六 「人間の価値は、自分が何を待たかではなく、他者にどれだけ与えたかで評価される」



No.13
特別な学び舎、SFCでできること

武田 祐子 (たけだ・ゆうこ)

経歴：2001年-2004年 看護医療学部 助教授
2005年-2024年 看護医療学部・健康マネジメント研究科 教授
学位：博士（看護学）
専門分野：臨床看護学（急性期看護、がん看護、遺伝看護）



●SFCのお気に入りスポット
アプローチから見えて来る、看護医療学部の校舎です。私は信濃町キャンパス所属だったので、月に数回しか来る機会はなかったのですが、落ち着いた雰囲気綺麗な校舎がお気に入りでした。
正面玄関上のペンマークと、ペンは剣よりも強し「CALAMVS GLADIO FORTIOR」のレリーフが目を惹きます。左側の二階建ての建物（桜の後ろ）は在宅看護実習棟で、在宅における和室や浴室等での実践ができる特徴的な作

●SFCの学生へメッセージ
SFCキャンパスは、藤沢市の「健康と文化の森」の中核に位置付けられ、まちづくりと共に発展してきました。長い歴史を持つ義塾の中で、新たな学部・研究科として発足し、面白いことへのアンテナを高く、自由な発想と行動力を発揮しながら、実績を積み重ねてきているのだと思います。
二〇一八年で百年を迎えた慶應看護が、SFCという地に看護医療学部を開設したことは大きな

りになっていて、学部見学の目玉にもなっています。
コロナ禍ではひっそりと寂しい限りでしたが、対面に戻り、学生の笑顔、賑やかなおしゃべりに溢れる校舎に足を踏み入れると心が弾みます。
写真は桜ですが、四季折々を感じさせる草木も楽しみの一つでした。この芝生は地域に開放され、保育園児が遊ぶ姿を目にすることもあります。さらに玄関には、スタッフの方のご配慮で素敵な鉢や花が飾られ、守衛さんの笑顔と共に心和む空間でした。
他キャンパスの皆様、SFC所属の方でも、看護校舎に来たことがない方は是非一度、足をお運びください。

●SFCの学生へメッセージ
もう一つ、最終講義を準備する中で学生の皆さんにお伝えしたいと思ったことがあります。私は看護という分野の臨床、研究、教育に力を入れてきました。このことに着目したのは四半世紀以上前になりますが、その頃は目を向ける医療職も一緒に活動できる看護職もほとんどいない状況でした。患者さんの話から必要性を感じ、最初は孤軍奮闘、粘り強く活動を続けてきた結果、多くの看護の仲間を得て、看護専門看護師という専門職を育成することもできました。そのことを振り返り、私自身がとても充実した、幸せな人生を歩めたことを実感しました。
SFCの学生の皆さんには、自身の関心を大切に、仲間づくりをしながら突き進んでいって欲しいと思います。

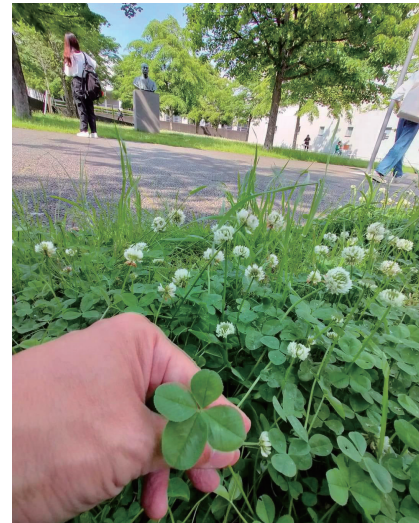
意味があります。医療中心の看護専門職の育成にとどまらず、保健・福祉を幅広く見据えて人々の健康や幸福に寄与し、自ら道を拓き、世界に発信することができる人材の輩出を目指すための環境としてSFCが選ばれたのです。
このようにSFCで学ぶ学生には多くの期待が寄せられ、その実現のためのリソースとしての教員、環境が準備されていることをぜひ活用して欲しいというのが最初のメッセージです。
もう一つ、最終講義を準備する中で学生の皆さんにお伝えしたいと思ったことがあります。私は看護という分野の臨床、研究、教育に力を入れてきました。このことに着目したのは四半世紀以上前になりますが、その頃は目を向ける医療職も一緒に活動できる看護職もほとんどいない状況でした。患者さんの話から必要性を感じ、最初は孤軍奮闘、粘り強く活動を続けてきた結果、多くの看護の仲間を得て、看護専門看護師という専門職を育成することもできました。そのことを振り返り、私自身がとても充実した、幸せな人生を歩めたことを実感しました。
SFCの学生の皆さんには、自身の関心を大切に、仲間づくりをしながら突き進んでいって欲しいと思います。



No.12
「半学半教」に満ちたこの世界

松井 孝治 (まつい・こうじ)

経歴：2013年-2024年 総合政策学部 教授
学位：修士（経営学）
専門分野：統治機構論



●SFCのお気に入り場所
メディアセンターの背後にある芝生。
ちょうど福澤諭吉先生像の通路を挟んだ向かい側あたりに毎年春になるとクローバー（シロツメグサ）の群生が発生しました。そしてその一角には、よく見ると四つ葉のクローバーが豊富に群生するエリアがありました。
それに気づいたのは、物故した畏友（本学教授）のことをぼーっと思いつきながらその草叢を見つめていたときのことでした。ふと四つ葉のクローバーが目につき、そのあと、次々と四つ葉のク

ローバーが目にとまり、また次の日、その次の日もみつかるので、私は一時期その一帯を泉下のその教授とこの世をつなぐポータルのように感じておりました。昨年の秋にきれいに刈取られて今年の三月時点ではその面影はどこにもありませんでしたけれど、またこの春から夏にかけてあのクローバーの群生が蘇って欲しいなと思っております。
●未来のSFC生に向けて
SFCは私にとって文字通り半学半教の場でした。
教えることと学ぶことが実は表裏一体で、「主」「客」「師」「弟」がしばしば入れ替わるというの、おそらくは人生の本質であり、妙味だと思います。
大学に限らず、国の政治における政治家と国民の関係、素敵な商品を企画・生産する作り手とその商品の

ファンとの関係、皆さんの馴染みの喫茶店、食堂、バー、劇場、寄席などそれらの常連客の関係でも、大なり小なり当てはまる部分があります。
常連客が醸し出す空気は、そのお店や場の性質を規定する重要な存在なのです。
「主客転倒」の語は、多くの場合悪い意味で用いられますが、私は、「主」「客」を、時に輪番で、ぐるりと入れ替えて、物事を対照・対称的な立場で見つめなおすのは、日本の文化であり、われわれの人生の本質につながるように思います。

この十年間、自分の霞が関と永田町の三十年の経験を皆さんに語り、皆さんに社会問題の解決を呼びかけ、そして皆さんの質問に答えるうちに、ほかならぬ私自身が自分自身の人生の意味を問いかげられ、やり残した課題を再発見し、京都市長への道を歩んだことこそが半学半教の典型だったのではないかと考えます。皆さんのご健闘を心からお祈り申し上げます。

この十年間、自分の霞が関と永田町の三十年の経験を皆さんに語り、皆さんに社会問題の解決を呼びかけ、そして皆さんの質問に答えるうちに、ほかならぬ私自身が自分自身の人生の意味を問いかげられ、やり残した課題を再発見し、京都市長への道を歩んだことこそが半学半教の典型だったのではないかと考えます。皆さんのご健闘を心からお祈り申し上げます。



朝鮮語インテンシブの授業を受けているある学生から春休みの宿題を出された。学生に勧めたい書籍や自身の愛読書の紹介を、とのことである。「喜んで」と返事をしたはよいものの、さて何を書くか。学生時代によく読んでいた紀行文、小説のこの本を書くか。数日間、逡巡したが、やはり私は言語学者であり、SFCでは主に言語を教えているので、ことばに関係する読書案内を書くことにした。今回は教科書や参考書まで登場して、このコーナーにははやや異色な展開となるが、気楽に読める本を選んだので、安心して読んでいただきたい。

世界の言語を広く眺めてみると：

さて、突然だが世界ではどのぐらいの言語が話されているか、ご存知だろうか。学者によって諸説はあるものの、少なく見積もっても三千ほど、多く見積もった場合には七千ほどの数になるといわれている(国の数が二百ほどであることを考えると、その多さに圧倒される。そして、日本語はそのうちのたった一変種に過ぎないのだ!)。世界にこんな多くの言語が存在すると知ったのなら、まずはマクロな視点から世界の言語を眺めてみたいと思う人は少な

くないだろう。まずは「広く浅く」から始めてみよう。

『寝るまえ5分の外国語 語学書書評集』黒田龍之助、白水社、二〇一六

外国語教材の書評という珍しいコンテンツの本。約百の言語が二ページごとに紹介されている。タイ語の教材には屋台での会話があり、初級から「蚊にさされる」という単語が出てくるらしい。また、ドイツ語の教材には「ビール」だけをテーマにしたものがあるとか。言語が多様なその教材もまた多様だと実感。ただし、注意したいのはこの本には「答え」が明示されていないということ。ナシゴレンの中に隠れるインドネシア語の特徴は? 算用数字がアラビア数字と呼ばれるわけは? 答えはそれぞれの本にあたって確認しなければならぬ。

『わたしの外国語漂流記 未知なる言葉と格闘した25人の物語』松村圭一郎他、河出書房新社、二〇二〇

二十五人の著者が様々な言語と格闘しながら日々、何を感じ、生きてきたかを記した本。言語それ自体の解説というよりは、ことばとのかに向き合い、生活や仕事に生かしてきたかに重点が置かれている。著者も

日本にとつての韓国という存在

『〇〇語のかたち/しくみ』『ニューエクスプレス(NE)〇〇語』シリーズ 白水社
前者はですまず体で文字・文法の大枠を解説。後者も易しい解説が特徴だが、ウズベク語、タタール語、カタルニャ語、アムハラ語：など珍しい言語が充実しているのが嬉しい。『NE上海語』を読んだ時は、子音の体系や人称代名詞が普通話とだいぶ違っていて衝撃を受けた。『NEポーランド語』では最後にキューリー夫人の読解があって、いつかこのレベルに到達したいと思ったものだ。

私の学生時代(二〇〇〇年前後)

は、今のように簡単にNotepadを聴ける時代ではなかった。韓国の音楽が好きだというと、モノ好きというレッテルを貼られ、渋谷のタワレコほどの大型店でも、上のほうの階の、それも「アジアの音楽」の一部にかろうじて韓国コーナーがある程度だった。そんな時代なので、韓国や朝鮮に関して一般人が触れられる情報は相対的に限られていたと言つてよい。学生時代から朝鮮語圏に興味があった私は、書店でもその地域のコーナーにはよく入り浸っていたものだ。今ほど情報過多でなかった時代に私が読んだ韓国・朝鮮にまつわる本の数々：その中でも今のSFC生に読んでほしい本を紹介しよう。

『ことばと文化の日韓比較』齊藤明美、世界思想社、二〇〇五

日本語と朝鮮語は文法構造が似ているため、学びやすい言語であるといわれる。しかし、そんな両言語だからこそ、落とし穴に注意。「お気軽に立ちよってください」と言われたときの日韓の反応の違いは? 誰かに褒められた時にどう反応する?

字面だけではわからない空気感や対人距離、文化の話。これらを通じて、日本語に対する考えも深まる。

『コリアン世界の旅』野村進、講談社、一九九九

コリアンといえは朝鮮半島にのみ目を向けがちだが、その文化は半島という中心の外、「周縁」にも確実に存在している。彼らの息遣いを辿る体験を通して、民族とは何かを考える契機を与えてくれる本。

これらの本を読むと、実はことばを学ぶという行為は、その言語体系を知るだけではないことがわかる。その裏に存在する歴史や文化、社会、人々の息遣いに触れることでもあるのだ。ただ、これが意外と難しい。とはいえ(今のところ)AIにはできない言語学習の面白さでもあるので、楽しまない手はない。

おわりに

SFCの言語コミュニケーション科目のHPを見ると、「言語の学習は視野を広げる窓」とある。これには言語を学ぶことは世界と繋がることであり、人生を豊かにすることでもあるという意味が込められている。読者諸氏の中には高校時代まで

ジャーナリスト、シェフ、学者、スポーツ選手など多様なのが面白い。学会発表で英語が全く聞き取れなかった学者がとったサバイバル英語術とは? ことばの通じないベネズエラの原住民と二か月暮らして気づいたこととは? この本を読めば、ことばの「現場」の奥深さに魅了されること間違いなし。

世界の言語・文化について見取り図が掴めたら、ぜひ興味を持った言語に挑戦してみよう。でもいきなり難しい文字や発音、単語・文法を学ぶのは敷居が高い。だからやっぱりやさしい本から読み始めたらいと思う。こんな本があるので、紹介する。

NHK語学テキスト NHK出版

英語はもちろん、独、仏、西、伊、中、朝、露、葡、亜の語学講座用のテキスト。世界広しといえど、公共放送でこれほど多くの言語を学べる国はそう多くないので、番組も含めて利用しない手はない。私は仏語はよくわからないのだが、二〇二四年三月の『まいにちフランス語』テキストではフランコフォニーを特集しており、大いに刺激を受けた。各言語圏について知れる連載も魅力。

英語が苦手だった人もいると思う。でも、だからといって言語を嫌いにならないでほしい。人と世界は(広義の)ことばを介して繋がっているし、ことばがあるから、時に笑い、感動し、人を愛することができる。世界に数千とある言語の中にはあなたに合う言語がきっとあるはずだし、世界のどこかには、あなたのまだ知らない魅力的な文化だってあるはずだ。まずはことばを身近に感じてみよう。そして、興味を持ったことばに出会えたら、ぜひ若き感性とお気に入りの一冊を携えて、その言語圏を訪れてみよう。



高木 丈也 (たかぎ・たけや)

総合政策学部専任講師。専門は、朝鮮語学、方言学、談話分析。

編集後記

慶應SFC学会

発行人 黒田 裕樹 (会長 / 環境情報学部 教授)

担当理事 宮代 康文 (総合政策学部 准教授)

事務局 田坂 真美

編集長 松本 ころこ (総合政策学部 3年)

副編集長 藤田 叶子 (総合政策学部 3年)

編集委員 東 史華 (総合政策学部 3年)

荒井 美海 (環境情報学部 3年)

福原 衣織 (総合政策学部 2年)

堀江 真咲 (総合政策学部 2年)

吉松 野乃子 (総合政策学部 2年)

井庭 晴香 (環境情報学部 2年)

藤井 美来 (環境情報学部 2年)

岡田 奈和実 (総合政策学部 1年)

多田 来希 (環境情報学部 1年)

野畑 六花 (環境情報学部 1年)

表紙 / 特集デザイン 藤田 叶子 (総合政策学部 3年)

「SFCの／と社会」といういかにも大きなテーマを前に、企画から発行に至るまで、心の中にはずっと迷いや恐れがあったような気がします。頑張っているけれど、実はそんなに大したことをしていないのではないかと。KEIO SFC REVIEWにしかできないことがあるはずだと信じているけれど、別にそうでもないのではないかと。

校了が近づくにあたり、改めて本誌のバックナンバーを読み返してみました。編集部が学生主体となって初めての号である7号では、集約されている情報量の多さに驚きました。42号「SFC“の”問題発見・問題解決」では、50名の先生方からSFCへの意見や提言が集められており、「SFCのすべてが分かる号を作るのだ」という気概と遂行力に頭が下がりました。「私たちはまだまだ」と、悔しいようなわくわくするような気持ちを抱えながら、気になる号を手にとってパラパラとページをめくってみました。大人とは何かを問う寄稿に涙したり、学生を激励する先生の言葉にハッとしたり。気づけば夢中になって読んでいました。それぞれの時代にSFCという社会を生きた人たちが、真剣に考え、考えたことを言葉にし、語り合いながら歩んできた姿がありました。

編集部室の本棚には、7号から76号までがずらりと並んでいます。今はそれがまるで宝の山のように見え、この77号ももうすぐ、その山の一層として積まれるのだということに込み上げてくるような喜びを覚えます。力不足を感じる場面は多々ありますが、多くの人にご協力いただいて無事発行を迎えた今号も、KEIO SFC REVIEWの一冊として自信を持ってお届けします。

お忙しい中、往復書簡や寄稿の執筆、インタビュー取材にご協力いただいた皆様、また、印刷について相談に乗ってくださった印刷所の皆様、本当にありがとうございます。今、この号を発行できたことには大変大きな意義があったのではないかと考えております。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

今後とも、KEIO SFC REVIEWをどうぞよろしくお願いいたします。

2024.7.12 編集長 松本ころこ

発行日 2024年7月29日

発行所 慶應SFC学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。

